

# 平安山原地区試掘調査

－伊礼原B遺跡ほか発掘調査事業－

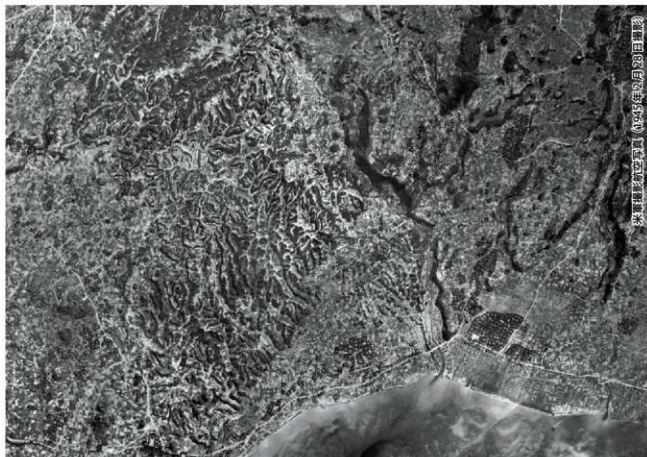
2011(平成23)年3月

沖縄県 北谷町教育委員会





巻首図版 1 調査対象地遠景 上・盛土前 北西から（平成 6 年）  
下・盛土後 南東から（平成 16 年）



米軍航空写真 (1945年2月28日撮影)

戦前の北谷町



埋め立てにより拡張した町域 (2001年)

近年の北谷町

## はじめに

北谷町教育委員会では、平成7年度から平成16年度まで、キャンプ桑江北側の大部分において返還に伴う試掘及び範囲確認調査を実施してまいりました。その結果、平成22年2月に国指定史跡となった伊礼原遺跡をはじめ、多くの埋蔵文化財が発見されました。

本報告は、試掘調査が未実施であった平安山原地区の調査結果を収録したものであります。

調査の結果、周知の遺跡である平安山原A遺跡の範囲が拡大することが確認されました。

平安山原A遺跡は、平成9年度の試掘調査で発見されたグスク時代から戦前にかけての集落遺跡で、平安山集落の成立を考える上で欠くことのできない貴重な遺跡の一つであります。

しかしながら、平安山原A遺跡は開発事業に伴う本発掘調査の対象となっており、遺跡の現地保存は大変困難な状況にあります。今後は、本発掘調査によって遺跡の全容が明らかになるものと確信しております。

本書が文化財保護へのご理解と認識を深める一助となり、また、本町の歴史を考える研究資料として御活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、本報告書を刊行するにあたり御指導と御協力を賜りました関係各位に深く感謝申し上げます。

平成23年3月

北谷町教育委員会  
教育長 比嘉 秀夫

## 例 言

1. 本報告は「伊礼原 B 遺跡ほか発掘調査事業」として、文化庁補助を受けて、平成 20 年度に実施した平安山原地区の試掘調査結果をまとめたものである。
2. 本報告書に掲載した地図は、国土地理院発行の 1/2,500 地形図（昭和 54 年測量）を元に北谷町役場都市計画課が作成したものである。本報告の方位は磁北をさす。
3. 現地作業の一部を国際航業株式会社に委託した。
4. 本報告は松原哲志が中心になり、下記の執筆分担者の協力を得て編集を行った。

第 I～III 章、第 IV 章 第 1 節・第 2 節 1、第 V 章	松原 哲志
第 IV 章 第 2 節 2・9・10・15	上地 千賀子
第 IV 章 第 2 節 3・5～8	呉屋 広江
第 IV 章 第 2 節 4・16	山城 安生
第 IV 章 第 2 節 11～14・17・18	島袋 春美
附編	松原 哲志
5. 遺物洗浄・接合・復元・実測・集計・写真撮影・図面整理・トレース図版作成などの資料整理は下記の人員で行った。

新垣 栄子	川畑 良子
-------	-------
6. 本書に掲載した試掘調査に関する写真、実測図などの記録及び出土遺物は全て北谷町教育委員会にて保管している。
7. 巻首図版 2 の戦前の北谷町の写真は、沖縄県公文書館所蔵の資料を基に作成したものである。

# 本文目次

## 巻首図版 はじめに

### 例言

第Ⅰ章	調査に至る経緯	1
	第1節 調査に至る経緯	1
	第2節 調査体制	1
第Ⅱ章	調査地の位置と環境	2
	第1節 地理的環境	2
	第2節 歴史的環境	5
第Ⅲ章	調査の方法と経過	8
	第1節 調査の方法	8
	第2節 調査経緯	11
第Ⅳ章	調査成果	11
	第1節 各試掘坑の概要	11
	第2節 出土遺物	25
	1. 土器	25
	2. 青磁	30
	3. 褐釉陶器	32
	4. 染付	32
	5. 本土産陶磁器	36
	6. 沖縄産施釉陶器	38
	7. 沖縄産無釉陶器	42
	8. 陶質土器	48
	9. 円盤状製品	49
	10. 石器	50
	11. 貝製品	52
	12. 銭貨	52
	13. 鉄製品	53
	14. 鉄滓	53
	15. 軽石製品	54
	16. 瓦・煉瓦	54
	17. 動物遺体	55
	18. 貝類遺体	56
第Ⅴ章	まとめ	60
附 編	第1節 調査に至る経緯	62
	第2節 調査の概要	62
	第3節 調査の成果	62

## 図版目次

巻首図版1	調査対象地遠景	図版 15	沖縄産無軸陶器2	47
巻首図版2	上・戦前の北谷町 下・近年の北谷町	図版 16	陶質土器	48
図版1	試掘No. 1	図版 17	円盤状製品	49
図版2	試掘No. 2	図版 18	石器	51
図版3	試掘No. 3	図版 19	貝製品	52
図版4	試掘No. 4	図版 20	銭貨	52
図版5	試掘No. 5	図版 21	鉄製品・鉄滓	53
図版6	試掘No. 6	図版 22	軽石製品	54
図版7	試掘No. 7	図版 23	瓦・煉瓦	54
図版8	試掘No. 8	図版 24	上:脊椎動物遺体 下:貝類遺体1	58
図版9	土器	図版 25	貝類遺体2	59
図版10	青磁	図版 26	出土遺物	63
図版11	褐軸陶器	図版 27	表採遺物	63
図版12	柴付	図版 28	試掘No. 1	64
図版13	沖縄産施軸陶器	図版 29	試掘No. 2・No. 3	65
図版14	沖縄産無軸陶器1			

## 図目次

第1図	北谷町の地形分類図	3	褐軸陶器	32	
第2図	北谷町の地質分類図	3	柴付	34	
第3図	北谷町米軍基地分布図	4	第20図	本土産陶磁器	37
第4図	北谷町の土地利用図	4	第21図	沖縄産施軸陶器	40
第5図	北谷町の遺跡	6	第22図	沖縄産無軸陶器1	44
第6図	新田試掘箇所併合図	9	第23図	沖縄産無軸陶器2	46
第7図	平安山原地区試掘箇所図	10	第24図	陶質土器	48
第8図	試掘No. 1	17	第25図	円盤状製品	49
第9図	試掘No. 2	18	第26図	石器	50
第10図	試掘No. 3	19	第27図	貝製品	52
第11図	試掘No. 4	20	第28図	銭貨	52
第12図	試掘No. 5	21	第29図	鉄製品・鉄滓	53
第13図	試掘No. 6	22	第30図	軽石製品	54
第14図	試掘No. 7	23	第31図	マスオガイの殻高-殻長相関関係	56
第15図	試掘No. 8	24	第32図	リュウキュウシラトリの殻高-殻長相関関係	57
第16図	土器	28	第33図	試掘調査位置図	63
第17図	青磁	31	第34図	調査位置拡大図	63

## 表目次

第1表	北谷町遺跡一覧	7	第14表	柴付出土量	33
第2表	試掘No. 1層序	12	第15表	柴付観察一覧	33
第3表	試掘No. 2層序	12	第16表	本土産陶磁器出土量	36
第4表	試掘No. 3層序	13	第17表	本土産陶磁器観察一覧	36
第5表	試掘No. 4層序	14	第18表	沖縄産施軸陶器観察一覧	39
第6表	試掘No. 5層序	14	第19表	沖縄産施軸陶器出土量	39
第7表	試掘No. 6層序	15	第20表	沖縄産無軸陶器観察一覧	43
第8表	試掘No. 7層序	15	第21表	沖縄産無軸陶器出土量	43
第9表	試掘No. 8層序	16	第22表	陶質土器観察一覧	48
第10表	平安山原地区試掘調査遺物出土量	26	第23表	瓦・煉瓦出土量	54
第11表	土器観察一覧	27	第24表	脊椎動物遺体出土一覧	55
第12表	土器出土量	27	第25表	貝類遺体出土量	57
第13表	青磁観察一覧	30			



# 第 I 章 調査に至る経緯

## 第 1 節 調査に至る経緯

今回試掘調査を行った地域は、旧キャンプ桑江北側に位置する。キャンプ桑江北側地区は平成 15 年 3 月に返還され、事前の平成 7～9 年度にかけ当該地における埋蔵文化財の確認調査を実施した経緯がある。その際の調査に至る経緯や調査手法については「キャンプ桑江北側返還に伴う試掘調査」(註1)に詳細が述べられているのでここでは割愛し、今回試掘調査を行った箇所について記述する。

本町では、平成 2 年 6 月の日米合同委員会においてキャンプ桑江北側地区返還を促進する旨が決定されたのを受け、返還後の跡地造成に利用する為の土を集積する計画が成された。当該地区について在沖米海兵隊基地施設技術部不動産課宛へ使用要請し、平成 6 年度より約 17,000㎡の面積に盛土される事となった。

平成 7 年度からは、前述した試掘調査を行う事となるが、先だって盛土された箇所はその規模により調査対象から除外せざるを得なかった。

平成 15 年 3 月にはキャンプ桑江北側地区が返還され、返還跡地では区画整理事業に伴う本発掘調査や、跡地利用に係る開発事業が順次実施された。盛土工から 10 余年の間に周辺の様相は大きく様変わりし、盛土地においても諸開発事業が段階的に実施されるのは決定事項であった。

過去に行われた試掘調査の結果より、盛土地北西側には千原遺跡(グスク時代)、南側には平安山原 A 遺跡(グスク時代・近世)、南東側には平安山原 B 遺跡(沖縄貝塚時代後期・グスク時代)が確認されている事から、当該地においても同時期の遺跡が確認されるものと想定された。関係部局との調整により、平成 20 年度内には盛土を移動する見通しが立ったため、盛土移動後、試掘調査を実施する事とした。

平成 21 年 2 月には盛土の殆どが移動されたため、平成 21 年 3 月 2 日から平成 21 年 3 月 25 日まで試掘調査を行った。なお、試掘坑の測量や重機による掘削等、調査の一部を国際航業株式会社(当時)に委託した。

註1 北谷町教育委員会 2005 「キャンプ桑江北側返還に伴う試掘調査—伊礼原 B 遺跡ほか発掘調査事業—」

## 第 2 節 調査体制

本補助事業による調査体制は、以下のとおりである。

事業主体	北谷町教育委員会		
	教 育 長	比嘉 秀夫	(平成 20～22 年度)
事業総括	教 育 次 長	謝花 良継	(平成 20・21 年度)
	同	大城 操	(平成 22 年度)
	社会教育課長	大城 操	(平成 20・21 年度)
	同	知念 喜忠	(平成 22 年度)
	同 補 佐	知念 良範	(平成 20・21 年度)

調査総括	文化係長	嘉陽田 朝榮（平成20～22年度）
調査員	主任主事	山城 安生（平成20～22年度）
	同	東門 研治（平成20～22年度）
	主事	松原 哲志（平成20～22年度）
資料整理員	臨時職員	新垣 栄子 川畑 良子（平成22年度）

## 第Ⅱ章 調査地の位置と環境

### 第1節 地理的環境

北谷町は、沖縄本島中部の西海岸沿いにあり、県都那覇市から北東約16kmに位置する。町勢は、人口約27,340人、面積13.78km<sup>2</sup>（平成22年3月現在）で、北は嘉手納町、東は沖縄市と北中城村、南は宜野湾市に隣接する。西は全域が東シナ海に面し、彼方に慶良間諸島が眺望される。気候は亜熱帯海洋性気候に属し、年平均気温が22度と四季を通して温暖である。

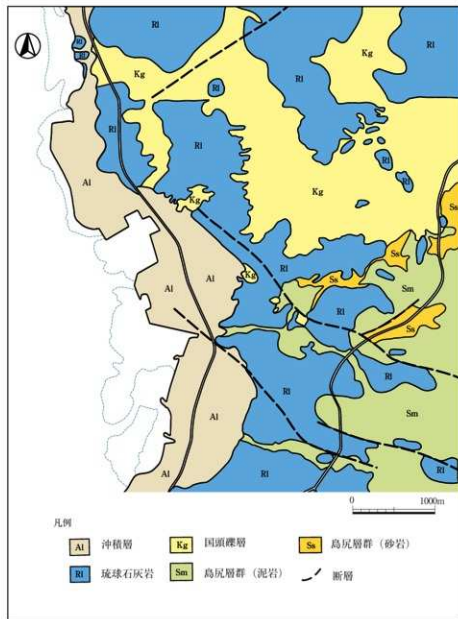
本町の地形を概観すると、東側に台地・丘陵が見られ、西側に低地・海浜・埋立地などが見られる（第1図）<sup>(註1)</sup>。台地は低地に向かって階段状に低くなる海岸段丘を成し、各段丘の標高は、東から西に向けて概ね、100m以上、100～50m、50～30mに分かれる。台地は浸食を受け丘陵を形成し、浸食作用によって運ばれた土砂は段丘下に堆積する。これら標高10m以下の肥沃な低地が町域西側に見られる。本町を流れる河川には、北から大道川、白比川、普天間川がある。いずれの河川も町域より東側の台地を源とし、東シナ海へ西流する。

地質は、鳥尻層群を基盤に琉球層群が不整合に覆い、低地では琉球層群を沖積層が不整合に覆っている（第2図）。琉球層群は、非石灰質の国頭礫層と石灰質の琉球石灰岩層があり、前者は沖縄本島北部の高島に、後者は本島中南部の低島に分布する。本町は国頭礫層の南限となっており、国頭礫層の風化による酸性土壌に生育する植物も確認される。

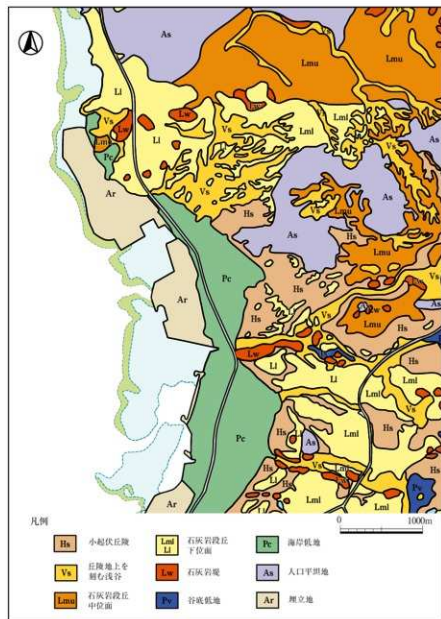
交通は、県都那覇市から本島北部へ延びる主要幹線道路の国道58号線が西海岸側を縦断している。また、北より県道23号線、24号線、130号線がそれぞれ国道58号線以东へ延び、概して交通の便に恵まれている。

本町は、米軍基地の多い沖縄県内においても基地占有率が3番目に高い自治体である。町域北側には極東一の規模を誇る嘉手納飛行場、中央部にはキャンプ桑江、南にはキャンプ瑞慶覧が所在し、その殆どは平地で、国道58号線沿いの利便性に富む地域に集中している。町総面積における軍用地の比率は、1946年に初めて100%から減じ、1981年にはハンビー飛行場やメイモスカラー地区が、2003年にはキャンプ桑江北側が返還されるも、未だ町域の53.5%は米軍基地が占めている（第3図）。返還跡地では急速な都市化現象が進み（第4図）、住宅地は限られた宅地部での密集・高層化の傾向にある。一方、軍用地内は整然と管理された芝地に建物が点在しており、一般宅地とのギャップは歪な景観を醸し出している。

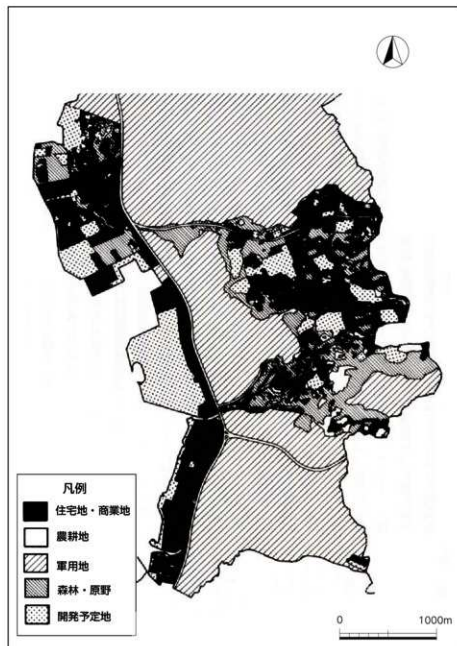
近年では、海浜部の埋立て整備により住宅地や商業地、公共施設が展開するなど新たな町づくりが進められている。また、美浜タウンリゾートアメリカンビレッジと呼ばれる商業エリアは、ストリートライブや各種イベント会場としても利用され、国内外の観光客が訪れる地として賑わいを見せている。



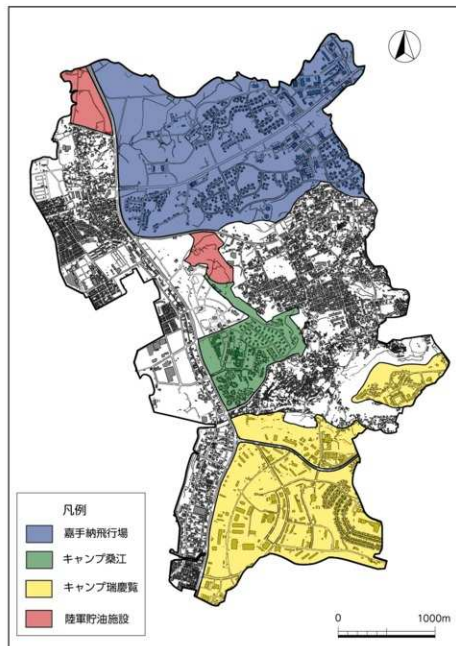
第2図 北谷町の地質分類図



第1図 北谷町の地形分類図



第4図 北谷町の土地利用図(1992年)



第3図 北谷町米軍基地分布図(2004年4月)

## 第2節 歴史的環境

北谷町には、現在48の遺跡が確認されている（第5図、第1表）。遺跡の多くは、町域西側の沖積地に所在し、キャンプ桑江北側地区が返還されるに至って確認された遺跡も少なくない。本町で確認されている遺跡の時期として、旧石器時代の桃原洞穴遺跡をはじめ、沖縄貝塚時代早～後期、グスク時代、近世の遺跡等、多時期に及んでいる。今回試掘調査を行った平安山原地区を中心に周辺の主な遺跡を概観したい。

まず、東側2.5kmの位置には、桃原洞穴遺跡がある。桃原洞穴遺跡は、今から約1万6千年前の旧石器時代に比定されている（註2）。遺跡は北谷町宇吉原東新川原に位置し、化石人骨（頭蓋骨）が検出され、鈴木尚氏により桃原洞人と命名されている。

次に南側約2.0kmには、現在本町にて唯一残存するグスクである北谷城がある。北谷城の立地する琉球石灰岩の舌状台地周辺は、町内においても遺跡の集中する地域となっており、丘陵南側には貝塚時代後期の遺跡や、グスク時代の城下町が形成されるなど、集落の形成過程を考える上で重要な地域である。北谷城は、これまでの発掘調査の結果から、12世紀に始まり15世紀の中頃に終焉したグスクであることが判明している。しかし、築城に関しての明確な記録はなく、金満按司や大川按司、北谷按司の3系統の興亡があったと伝えられているが、伝承の域を出ない。戦前、北谷城以南一帯の字北谷地域は、沖縄本島三大美田の1つである北谷ターブクァ（北谷田圃）と呼ばれる田園風景が広がっており、それらの生業を支えていたのは豊富な湧水であった。

本町では、東側石灰岩台地を源とする河川の他に段丘下から湧き出す湧水が多く、その一つにウーチヌカーが挙げられる。ウーチヌカーは、試掘箇所から南東側約0.4kmの丘陵麓に位置し、平成22年2月に国指定史跡となった伊礼原遺跡を語る上で無くてはならない水源である。

伊礼原遺跡は、ウーチヌカーを源とする低湿地区と砂丘地区とに分けられる貝塚時代早期から戦前に至るまでの複合遺跡である。低湿地区では古環境復元可能な程の植物遺体の他、櫛や石斧の柄等の木製品が出土するなど新発見が相次いだ。砂丘地区では、大きな波力により住居址の一部を含む砂丘の侵食が認められ、その後の砂丘の回復とともに居住区が拡大ゆく様相を確認することができた。また、沖縄諸島の先史時代編年体系が網羅できるほど各型式の土器が出土する等、沖縄県内においても稀有な遺跡である事が判明している。キャンプ桑江北側地区にて確認された遺跡には、伊礼原遺跡の他（註3）、伊礼原B・D・E遺跡、平安山原A・B・C遺跡、千原遺跡、小堀原遺跡、後兼久原遺跡があり、相当数の遺跡が密集していることが判る。

試掘箇所より西側は、埋立地と東シナ海が迫っているため遺跡は確認されていない。試掘箇所から北西側約1.0kmの辺りに眼を向けると、クマヤー洞穴遺跡や砂辺貝塚が近在している。クマヤー洞穴遺跡は、貝塚時代早期からグスク時代に至る遺物が確認されており、特に中期（宇佐浜期）の改葬人骨が多数検出されており注目される。砂辺貝塚は、貝塚時代中～後期、グスク期の遺跡である。1986～1988年に町教委にて実施された発掘調査以前には「湮滅に近い程壊されている」と記録されていたが、方形に配石された住居址が良好な状態で確認された。遺跡周辺には拝所も多く、砂辺集落の成因を考える上で重要な遺跡である。

北側には、近世以降の大作原古墓群やカーシーノボントン遺物散布地が嘉手納空軍基地内に位置している。嘉手納空軍基地内において墓群は比較的確認されているが、地中に眠る埋蔵文化財の詳細は判然としない。近年、嘉手納町域の基地内にて貝塚時代前期から中期にかけての良好な住居址が発見されていることから、本町域でも今後同様な遺跡が発見される可能性が考えられる。



第5図 北谷町の遺跡

第1表 北谷町遺跡一覧

No.	遺跡名	時期	所在地
1	砂辺サーク原貝塚	前期	字砂辺差久原
2	砂辺サーク原遺跡	後期～近世	字砂辺加志原
3	砂辺貝塚	後期～グスク	字砂辺村内原
4	砂辺ウガン遺跡	後期～グスク	字砂辺加志原
5	カーシーノボントン遺物散布地	グスク	字砂辺加志原
6	クマヤー洞穴遺跡	前期～グスク	字砂辺村内原
7	浜川千原岩山遺物散布地	後期	字浜川浜川千原
8	浜川ウガン遺跡	後期	字浜川千原
9	上・下勢頭区古墓群	近世	字上勢頭平安山伊森原・伊礼伊森原・下勢頭平安山下勢頭原
10	伊礼原遺跡	前期～近世	字伊平伊礼原
11	伊礼原B遺跡	近世・近代	字伊平伊礼原
12	桑江ノ殿遺物散布地	後期～近世	字桑江小堀原
13	桑江遺物散布地	後期	字桑江後兼久原
14	鹿化石出土地	旧石器	字吉原栄口原・桃原
15	前原古島A遺跡	近世	字桑江前原
16	前原古島B遺跡	近世	字桑江桑江原・前原
17	伊地差久原古墓	近世	字桑江伊地差久原
18	前原古墓群	近世	字桑江前原
19	桃原洞穴遺跡	旧石器	字吉原東新川原
20	インディアン・オーク号の座礎地	近世	字北谷地先
21	池グスク	後期	字吉原東字地原・西字地原
22	白比川河口遺物散布地	グスク	字北谷西表原
23	北谷城遺跡群	後期～近世	字大村城原
24	北谷城第7遺跡	後期～近世	字大村城原
25	北谷番所址	後期～近世	字北谷北谷原
26	吉原東角反原遺物散布地	グスク	字吉原東角反原・西角反原
27	山川原古墓群	近世	字大村山川原
28	玉代勢原遺跡	後期～近世	字大村玉代勢原
29	長老山遺物散布地	後期～グスク	字大村玉代勢原
30	大道原A遺跡	後期	字北谷大道原
31	大道原B遺跡	後期	字北谷大道原
32	新城下原遺跡	早期～近世	字北谷安仁屋原
33	後兼久原遺跡	グスク～近世	字桑江小字後兼久原・字桑江小字小堀原
34	塩川原遺跡	後期	字北谷塩川原
35	稲千原遺跡	前期	字北前稲千原
36	伊波川原遺跡		字北前横高原・伊波川原
37	伊礼伊森原遺跡	後期	字上勢頭伊礼伊森原
38	東表原遺跡		字北谷東表原
39	安仁屋原遺跡		字北前安仁屋原
40	千原遺跡	後期	字伊平千原
41	平安山原A遺跡	後期	字伊平平安山原
42	平安山原B遺跡	後期	字伊平平安山原
43	平安山原C遺跡		字伊平平安山原
44	伊礼原D遺跡	後期	字伊平伊礼原
45	伊礼原E遺跡		字伊平小字伊礼原
46	小堀原遺跡	後期	字桑江小堀原
47	大作原古墓群	前期～近世	字伊平大作原
48	横高原遺跡	後期	字北前横高原

北谷町文化財調査報告書 第28集「伊礼原D遺跡」(2008)の表1北谷町遺跡一覧を改定

註:「前期」→「貝塚前期」、「後期」→「貝塚後期」をさす。

〔参考文献〕

- ①中村恵・田場勝也ほか「北谷町の遺跡-詳細分布調査報告書-」北谷町文化財調査報告書 第14集 北谷町教育委員会 1994年  
 ②中村恵・東門研治・島袋春美「キャンプ桑江北側返還に伴う試掘調査-伊礼原B遺跡ほか発掘調査事業」北谷町文化財調査報告書 第23集 北谷町教育委員会 2005年3月  
 ③中村恵・東門研治・松原哲志・島袋春美ほか「伊礼原B遺跡・伊礼原E遺跡「キャンプ桑江北側返還に伴う発掘調査事業(平成10～14年度)」北谷町文化財調査報告書 第27集 北谷町教育委員会 2008年3月

\*番号は位置図に付随

- 註1 第1図と第3図は、北谷町史1巻より抜粋し加筆修正した。第4図は、北谷町史1巻より抜粋した。
- 註2 北谷町の遺跡(1994)による。近年では、発見された人骨は特に古い特徴はなく、年代は縄文時代早期にあたる完新世(1万年前～現在)の可能性がもたれている。
- 註3 伊礼原遺跡は当初、砂丘地区の伊礼原A遺跡、低湿地区の伊礼原C遺跡と呼称していたが、連動して生活址が確認されることから、両遺跡をまとめて伊礼原遺跡とした経緯がある。

#### <参考文献>

- 北谷町教育委員会 1994 「北谷町の遺跡—詳細分布調査報告書—」
- 北谷町教育委員会 2005 「北谷町史 第一巻 通史編」
- 北谷町教育委員会 2007 「伊礼原遺跡—伊礼原B遺跡はか発掘調査—」
- 嘉手納町教育委員会 2009 「野国後原遺跡B地点」

## 第Ⅲ章 調査の方法と経過

### 第1節 調査の方法

今回の試掘調査対象地は、平成7年度～9年度にかけて行ったキャンプ桑江北側の試掘調査時に盛土があったため調査できなかった地域である。調査区の設定は、平成7年度～9年度の試掘調査時に設定した30m×30mのメッシュの交点を試掘ポイントとする方法を踏襲した。

まず、前回の試掘調査箇所を図上復元し、復元した試掘箇所から今回の試掘箇所を割り出した(第6図)。割り出したポイントを基準点に、基準点の南西側5m×5mを掘削対象範囲とし(試掘坑の北東隅を基準点とする)8箇所の試掘坑を導き出したが、現地にて試掘坑を仮設定した所、以下の状況が確認できた。

- ①試掘 No. 2 の西側付近には、文化財が確認されていない場所に沈砂地が設けられていた。
- ②試掘 No. 5 と 6 の箇所は、盛土の厚薄が認められた。

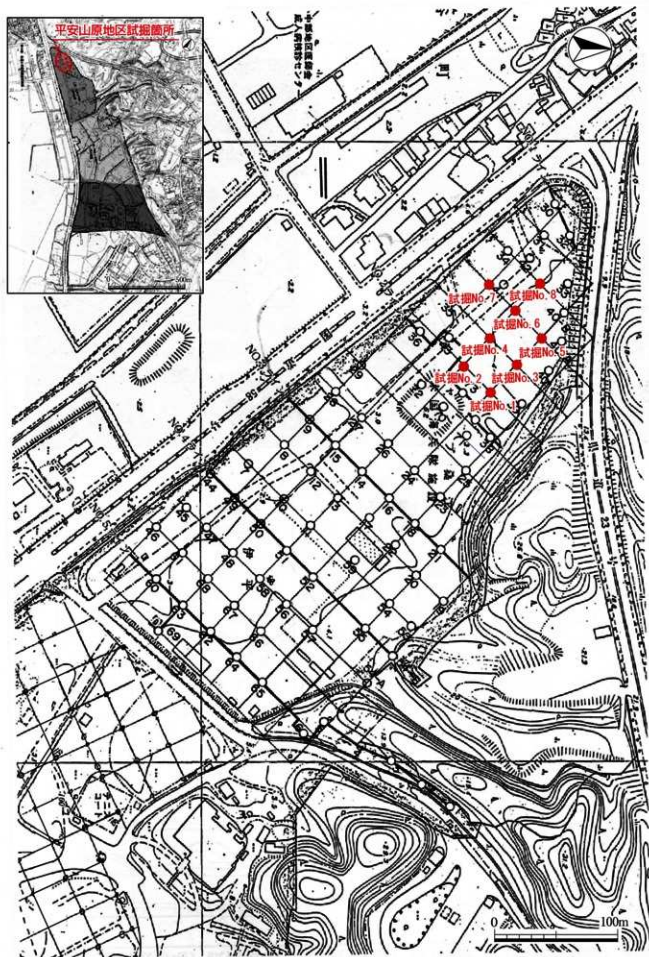
上記の状況から、

1. 試掘 No. 2 の基準点を北西隅にし、沈砂地と掘削箇所の距離を設けることにした。
2. 試掘 No. 5 と 6 の基準点を南東隅にし、盛土が薄い場所を調査区に選定した。

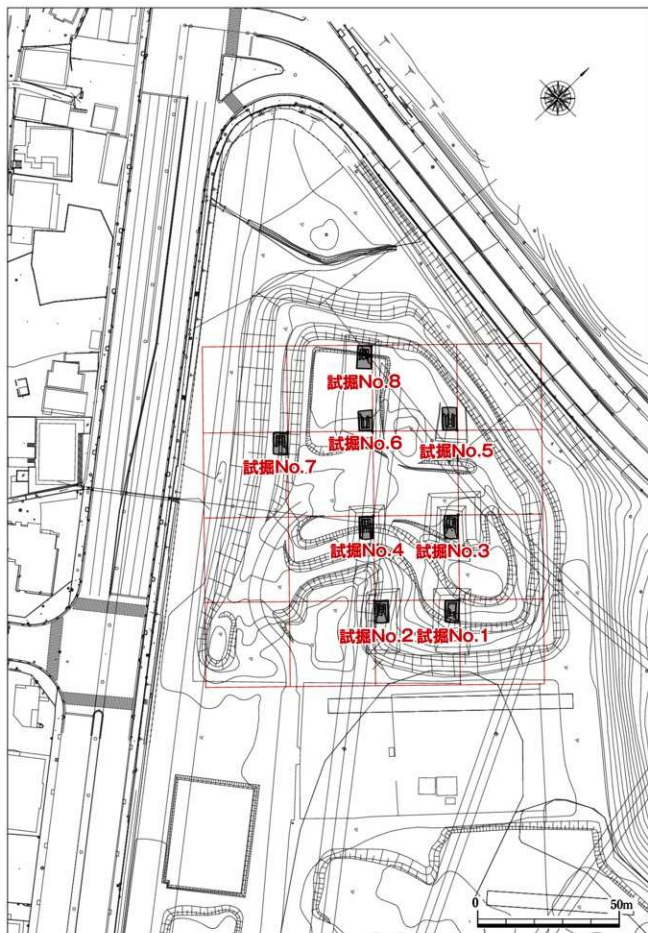
以上、今回の試掘坑は、前回の考えを踏まえながら、現況にあわせた形で設定した(第7図)。

過去の試掘調査の結果等から、当該地周辺は、約1mの米軍造成土を掘りあげると概ね戦前から近世の旧表土が現れ、その下層にグスク時代の遺物包含層や淡水性巻貝を含む粘質土の存在が確認されている。粘質土は主に東側の丘陵地付近によく見られ、西側へ行くにつれて薄くなり遂には見られなくなる。粘質土の有無に関わらず言及できる事に、砂層の検出と湧水の確認が挙げられる。これらの条件から、機械力による掘削後の壁面崩落は免れないものと判断し、1m掘削しては1m幅の足場を確保する方法を取った。この様に階段状に掘り進めると、掘削深度が深くなるにつれ調査区が狭小になるため、堆積状況を判断する材料に乏しくなってしまう事と、壁面図作成において、どうしても段差部分に係る箇所の精度が落ちる事は否めない。しかし、調査区を大きく広げる事は、より広範囲の崩落を呼び込みかねない地下環境である事と、作業員の安全第一を考慮し上記の調査方法にて現場作業を実施した。





第6図 新旧試掘箇所併合図



第7図 平安山原地区試掘箇所図

## 第2節 調査経緯

- 現地調査は、平成21年3月2日から平成21年3月25日まで行った。以下に調査経過を概述する。
- 3月2日 現地にて測量・仮縄張りを行い、試掘坑の位置を設定。
  - 3月3日 バックホウにて試掘 No.7 付近の伐開及び試掘 No. 6・8 現地盤上の盛土の除去を行う。
  - 3月4日 試掘 No. 3・5 現地盤上の盛土の除去。
  - 3月5日 試掘 No. 3 の残土・法面の成形や危険箇所の仮囲いを行う。降雨の為、9:30 に作業中止。
  - 3月6日 試掘 No. 2・4 の盛土除去。激しい雨の為、16:00 に作業中止。
  - 3月9日 試掘 No. 4 の盛土除去及び磁気探査実施箇所の測量。激しい雨の為、昼前に作業中止。
  - 3月10日 試掘 No. 1・4 の盛土除去を行う。ほぼ全ての試掘坑において目標地盤に到達。
  - 3月11日 重機による法面成形や小段削出と全試掘坑において、1 回目の水平磁気探査を実施。
  - 3月12日 磁気探査異常点の確認掘削を行う。鉄筋等を確認。実弾等の危険物は発見されなかった。
  - 3月13日 1 回目の磁気探査終了。深度 1m まで再び重機掘削を行う。全ての試掘坑の掘削を完了。
  - 3月16日 2 回目の磁気探査を実施。異常点が少なかったため、重機掘削を併行して行う。
  - 3月17日 各試掘坑の清掃及び検出遺構平面図・壁面断面図作成を行う。
  - 3月18日 各試掘坑壁面図化・写真撮影・トレンチ形状測量を行う。試掘 No. 5 にて深掘りを実施。
  - 3月19日 全ての試掘坑にて重機による深掘りを実施した。湧水とともに崩落が始まるため、下位の土層を重機で回収し、即座に埋め戻した。
  - 3月23日 各試掘坑から回収した砂より遺物採集を行う。現地盤上の残土の埋め戻し作業を実施。
  - 3月24日 早朝より降雨。現場作業は中止。
  - 3月25日 現地盤上残土の整地作業を行い、全ての野外作業を終了した。

## 第Ⅳ章 調査成果

### 第1節 各試掘坑の概要

本節では、試掘調査の結果確認された遺構や堆積状況について試掘坑毎に紹介する。各試掘坑を紹介するにあたり、その様相を一目で把握できるよう、1 試掘坑に対し 1 頁に纏めるよう努めた。具体的には、土層断面図・柱状図（略図）・遺構検出状況平面図（遺構が検出された試掘坑のみ）・土層写真・試掘坑位置図を、それぞれ 1 頁に掲載している。土層断面図・柱状図・平面図の縮尺は統一を図り、柱状図は各試掘坑間で同一の層序と考えられるものを同色にて示した。土層注記に関しては、紙幅の都合上 1 頁に収まりきれない試掘坑もあったため、全試掘坑分をまとめて以下に記述することとした。その為、若干余白が目立つ頁も生じてしまったが、どうか御了承いただきたい。

なお、出土遺物の詳細については、次節にて種類毎に紹介する。

#### 試掘 No. 1

米軍整地土の直下に黒色土壌を検出した。掘削を進めたところ、白砂層を掘り込むように北側に向かって急激に落ち込んでいたため、何らかの目的を持った人為的な地形と判断した。作図した北壁はこの落ち込みの真只中であり、3 分層した土層もこの落ち込みに伴う一連のものと判断し、II a

～c層に細分した。II a層からは、煉瓦・番線・ガラス等といった戦前の集落に起因するような新しい遺物が出土している。獣骨が比較的多く認められたII b層を除去すると、巨大な礫が検出された。落ち込みの深いところで平坦気味に込められており、この落ち込みの用途に大きく関連するものと思われる。これら巨礫を除去し始めたところで水が湧き始めたため、下層の様相は不明である。

第2表 試掘 No. 1層序

地点	層名	土色略号	土色・土質	内容
試掘 No.1	I	25Y7/4	浅黄色土	人頭大以下の礫含む整地土。西壁では上位に路盤を伴うため、米軍による整地であることが分かる。
	II			用途不明の大型掘り込み。以下の3細分した。
	II a	25Y3/3	暗オリーブ褐色粘質シルト	上位20cmには褐色粘質土(10YR4/6)が帯状にみられる。礫(径約20cm)・半腐食植物・印刷磁器・煉瓦・番線・ガラスを含む。木根も目立つ。
	II b	-	-	II a層と灰黄色砂(25Y6/2)の混合土。獣骨多い。
	II c	25Y3/3	暗オリーブ褐色粘質シルト	人頭大～1m超の礫が込められる。陶磁器含む。
	III	25Y7/3	浅黄色中砂	いわゆる白砂であるが、II層の影響を強く受けて乱れる。小木根が張る。

試掘 No. 2

米軍整地土の直下に黒色土壌を検出した。掘削を進めたところ、海性堆積の粗砂面上に遺構状の黒色プランが散見された。壁面観察によると黒色土壌は3分層(III～V層)が可能で、遺構状となるV層は更に細分できる。このV層からは、ビニールに包まれた衣類が出土し、釦の模様から米製と思われる。下層砂の遺物採集では、貝塚時代の土器片が回収されたが、いずれも細片で量も僅少であった。また、標高約0.7mのところ平坦なビーチロックが検出された。

第3表 試掘 No. 2層序

地点	層名	土色略号	土色・土質	内容
試掘 No.2	I	-	-	平成の残土。
	II	25Y7/4	浅黄色土	米軍による整地土。礫(人頭大以下)含む。
	III	-	-	IV層土を主体とする版築状の混合土。礫(拳大)を多く含む。
	IV	25Y3/3	暗オリーブ褐色粘質シルト	下位が赤味がかかる(鉄分沈着?)。風化石灰岩礫(径20cm以下)・ガラス含む。
	V	25Y6/2	灰黄色砂質土	戦後の撻乱を一括した。多少の切り合い関係が認められ、浅黄色粗砂(25Y7/4)が互層状となる箇所もある。ビニール・アメリカ製衣類が出土。
	VI	25Y7/4	浅黄色粗砂	ところにより黄味がかかる。
	VII	7.5YR6/8	橙色粗砂	下位の赤味が強い。
	VIII	7.5YR8/4	浅黄褐色粗砂	サンゴ・貝・礫を多く含む。

## 試掘 No. 3

米軍整地土の直下に黒色土壌(Ⅱ・Ⅲ層)を検出した。8箇所の試掘坑中最も黒色土壌の層厚がなく、砂面の検出レベルが高標高となっている。また、全体として東→西への傾斜も看取された。これらの事象は砂丘地の原地形に起因するものと考えられる。Ⅲ層からは煉瓦が出土する等、試掘 No. 1のⅡa層と類似した状況が認められた。

Ⅳ層上面ではⅢ層起源と考えられる埋土を持つ遺構プランが検出されている。Ⅳ～Ⅵ層の砂からは定量の土器片が出土した。特にⅣ・Ⅴ層の層離面付近のレベルから多く出土した。土器は薄手の平底であり、貝塚後期のものと考えられる。重機による深掘りは標高約-1mまで達したが、ピーチロックは検出されず、橙色の粘土(Ⅷ層)が確認された。東側丘陵に起源を持つ土壌と考えられる。海性堆積砂であるⅧ層の上位からは、摩滅した薄手の土器片が採取されている。

Ⅷ～Ⅸ層からは合弁貝が多数認められた。

第4表 試掘 No. 3層序

地点	層名	土色略号	土色・土質	内容
試掘 No.3	I	10YR5/6	黄褐色土	米軍による整地土。
	II	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色粘質土	Ⅲ層を主体とするが、黄褐色土のランダムな混入が多い。
	III	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色粘質シルト	下位ほど砂質化する。礫(径30cm以下)・陶磁器・半腐食植物・煉瓦を含む。西側への傾斜が認められる。
	IV	2.5Y6/3	にぶい黄色粗砂	しまり弱い。黄味がかかるところがある。Ⅴ層との層離面に打ち上がり貝(二枚貝・マガキガイ)がみられ、このレベルでの遺物出土が多い。
	V	2.5Y7/3	浅黄色中砂	
	VI	5Y6/2	灰オリーブ色粗砂	サンゴ・貝・礫を多く含む。下位では礫(最大～40cm)が多くみられる。
	VII	2.5Y6/8	明黄褐色粘土	山土? 摩滅した薄手の土器片
	VIII	-	-	砂?
	IX			

## 試掘 No. 4

米軍整地土の直下に黒色土壌を検出した。このⅢ層直下では草のような植物が敷き詰められているようにも見える状態で検出され、更にその下には黄褐色の粘土(Ⅳ層)が平坦面を成していた。床土・粗雑といった耕作関連遺構も想定される。この粘土層を掘り下げると、再び黒色土壌(Ⅴ・Ⅵ層)が検出された。西側に礫を伴って落ち込むⅤ層は人為的に構築されたものであろう。Ⅵ層は均質でカワニナを多く含む。Ⅵ層直下で激しい湧水が始まり、標高約0mで平坦なピーチロック面を検出したため、掘削を終了した。

第5表 試掘 No. 4層序

地点	層名	土色略号	土色・土質	内容
試掘 No.4	I	10YR8/4 10YR5/6	浅黄褐色土(上方) 黄褐色土(下方)	米軍による整地土。
	II	7.5Y5/3	灰オリーブ色土	米軍による整地土。石灰岩礫多量。
	III	10YR3/3	暗褐色粘質シルト	黄褐色土が混入。
	IV	2.5Y5/3	黄褐色粘土	直上に草のような植物が南北方向に散かれている(倒れている?)。床土?
	V	2.5Y3/2	黒褐色粘質土	上位は粗砂を含む。西側の落ち込みには礫(拳～人頭大)が込められる。
	VI	2.5Y3/2	黒褐色粘質シルト	カワニナを含み、非常に均質。
	VII	10YR3/4	暗褐色中砂	

試掘 No. 5

米軍整地土の直下に黒色土壌(V～VII層)を検出した。上層のV層からは缶が出土したため戦前のものと思われる。下層のVII層からは帰属時期を示すような遺物の出土は確認できなかったが、獣骨が目立ったことは留意したい。重機による深掘りは標高約0mまで達したが、ビーチロックは検出されなかった。海性堆積砂(IX層)からは、曾畑式土器の口縁部片(内外面施文)が採取された。

第6表 試掘 No. 5層序

地点	層名	土色略号	土色・土質	内容
試掘 No.5	I	-	-	平成の残土。
	II	5Y4/4	暗オリーブ色土	基地返還後の整地土。
	III	2.5Y8/2	灰白色土	改良土。米軍施設的路盤材。
	IV	10YR5/6	黄褐色土	米軍による整地土。混合土であり、下面は乱れる。
	V	2.5Y3/2	黒褐色粘質シルト	礫の混入が目立つ。陶磁器・缶含む。
	VI	5Y6/4	オリーブ黄色粗砂	サンゴ・貝・礫を多く含む。東西壁面の観察から、北側には広がらない。
	VII	2.5Y3/2	黒褐色粘質シルト	下位ほど砂質化する。礫・陶磁器・獣骨・貝含む。
	VIII	2.5Y7/3	浅黄色中砂	
	IX	-	-	サンゴ・礫を多く含む。曾畑式土器(内外面施文口縁部片)出土。

試掘 No. 6

米軍整地土の直下に黒色土壌(V層以下)を検出した。黒色土壌最上層のV層に含まれる遺物は新しく、土も乱れる。VII層からは、近世陶磁器に混じってガラス片が確認されており、黒色土壌全体は戦前に帰属する可能性がある。試掘坑の中央から北側には、南壁とは異なった堆積状況を示し、大型礫の出土も目立った為、遺構の可能性を考え補足的に東壁面も作図した。砂層から採集できた遺物は僅少であった。

第7表 試掘 No. 6層序

地点	層名	土色略号	土色・土質	内容
試掘 No.6	I	-	-	平成の残土。
	II	25Y4/3	オリーブ褐色粘質土	基地返還後の整地土。
	III	25Y8/2	灰白色土	改良土。米軍施設的路盤材。
	IV	5Y5/4	黄褐色土	米軍による整地土。石灰岩礫多量。北側では層下に浅黄色粗砂が堆積。
	V	25Y3/3	暗オリーブ褐色砂質シルト	攪乱土。陶磁器・細ロープ含む。
	VI	25Y4/4	オリーブ褐色砂質土	小礫含む。均質。
	VII	5Y3/1	オリーブ黒色粘質シルト	礫・炭化物粒・陶磁器・ガラス含む。
	VIII	25Y5/4	黄褐色粗砂	貝・礫含む。
	IX	25Y4/2	暗灰黄色砂質土	
	X	25Y7/4	浅黄色粗砂	サンゴ・貝・礫を多く含む。下位はど砂が粗い。
	X I	25Y8/2	灰白色中砂	
	X II	5Y7/1	灰白色粗砂	サンゴ・礫（拳大）を多く含む。
	1	25Y4/3	オリーブ褐色粘質土	小礫含む。落ち込みに礫（人頭大）が込められる。
	2	5Y3/1	オリーブ黒色粘質シルト	灰白色砂を帯状に含む。
	3	25Y4/6	オリーブ褐色砂質土	下位に小礫含む。
	4	25Y4/3	オリーブ褐色砂質土	貝含む。
5	25Y4/2	暗灰黄色砂質土	灰白色砂を帯状に含む。落ち込みに礫（人頭大以上）が込められる。	

試掘 No. 7

層序表から紹介する。

第8表 試掘 No. 7層序

地点	層名	土色略号	土色・土質	内容
試掘 No.7	I	25Y4/3	オリーブ褐色粘質土	基地返還後の整地土。
	II	-	-	米軍による整地土。トロココレール出土。
	III	25Y4/2	暗灰黄色粘質シルト	上位に木材が廃棄されている。
	IV	10YR4/4	褐色砂質土	粘性有。下位から古銭が出土。
	V	10YR5/6	黄褐色粗砂	
	VI	-	-	微小貝・サンゴの打ち上がり。
	VII	10YR5/6	黄褐色粗砂	
	VIII	10YR7/6	明黄褐色粗砂	サンゴ・礫を多く含む。
	IX	5Y7/1	灰白色粗砂	サンゴ・貝・礫を多く含む。
	1	10YR3/2	黒褐色粗砂	貝を含む。溝とするならば、底面は西へ傾斜する。
	2	10YR7/4	にぶい黄橙色粗砂	

米軍整地土が最も厚い箇所であった。黒色土壌からは古銭が出土し、除去後の砂面では東西に延びる溝状の遺構プランを検出した。溝底面は西側に傾斜している。この試掘 No.7 を始めとして、海側に位置する試掘 No.2・4 における砂は赤味がかっており、互層堆積を呈しているという共通点が認められる。砂層からは白色粒を含むやや軟質な土器片を採取した。

### 試掘 No. 8

米軍整地土の直下では、砂を挟んで2枚の粘土層が確認された。粘土層直下にはやや均質な黒色土壌が堆積し、下部には遺構が伴う。遺構からは陶磁器・舟釘が出土しており、近世のものと思われる。下層砂からは薄手の土器片が採集された。摩滅したのも混じる。また、標高約0mで岩盤に当たったが、湧水のため、試掘 No.2・4 と同じ平坦ビーチロックであるかどうかは確認できなかった。

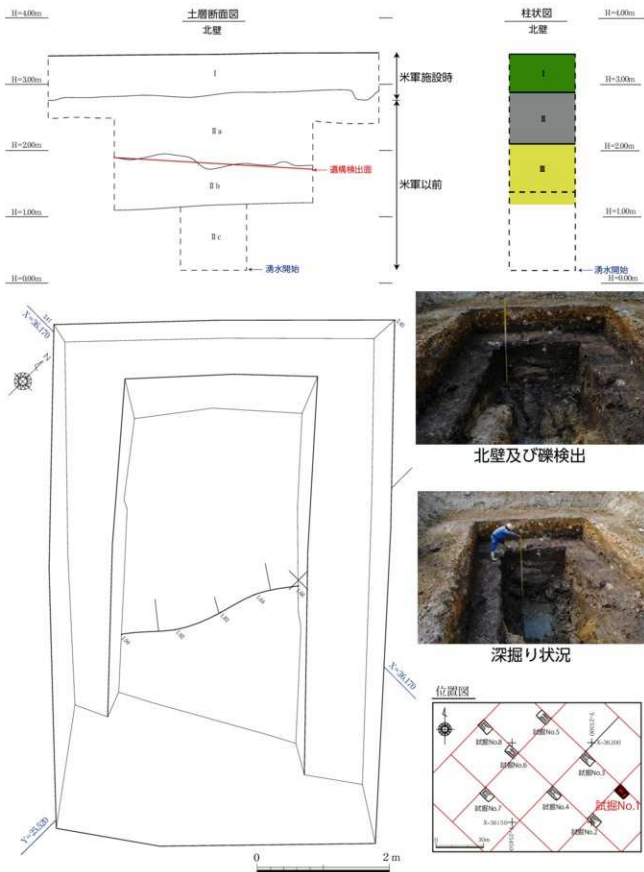
第9表 試掘 No. 8層序

地点	層名	土色略号	土色・土質	内容
試掘 No.8	I	25Y4/4	オリーブ褐色土	基地返還後の整地土。
	II	5Y8/2	灰白色土	改良土。米軍施設の路盤材。
	III	25Y6/6	明黄褐色土	米軍による整地土。
	IV	25Y4/3	オリーブ褐色粘土	
	V	25Y7/4	浅黄色中砂	マーブル状の筋がみられる。
	VI	25Y4/6	オリーブ褐色粘土	
	VII	25Y3/3	暗オリーブ褐色砂質シルト	炭化物・サンゴ・カワニナを微量含む。遺物は少ない。下方には遺構状の掘り込みが認められ、最下部は砂多量。
	VIII	10YR6/4	にぶい黄橙中砂	
	IX	10YR7/3	にぶい黄橙中砂	
	X	25Y8/2	灰白色粗砂	
	XI	5Y7/1	灰白色粗砂	サンゴ・礫(拳大)を多く含む。摩滅した薄手の土器出土。

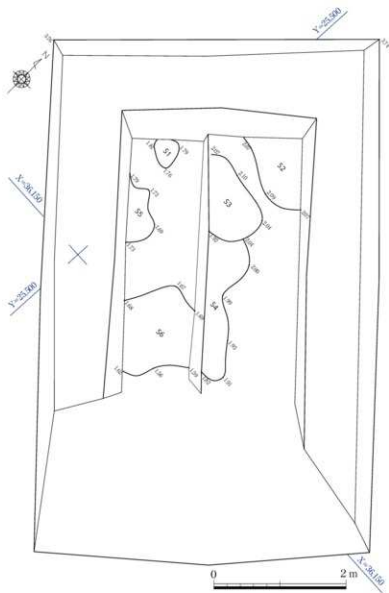
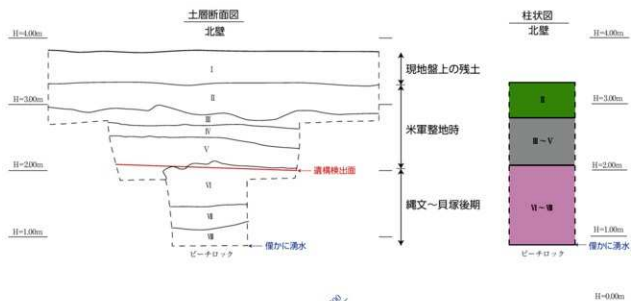
### 小結

今回の試掘調査実施地区においては、各試掘坑とも、砂層→黒色土壌→米軍施設時の整地という堆積状況を示していることが看取できた。これまでに行われている周辺の発掘調査結果（現在資料整理中の為、未報告）から、伊平地区における黒色土壌はグスク時代～戦前の土壌である事が確認されている。黒色土壌を除去すると、例外なく砂面が検出された。上位は海岸～砂丘の構成砂であり、下位は海中堆積に由来するものと思われる。陸側に位置する試掘坑からは白砂層が検出された。砂層からの人工遺物は全体として僅少であったが、試掘 No.3 では定量の資料が得られている。試掘 No.3 は砂面の検出レベルが高く、海から離れた比較的高標高のエリアに遺物が高密度で包含されている可能性が考えられる。厚く堆積した海砂下部よりビーチロックが確認された試掘坑もあった。





第8図・図版1 試掘 No.1



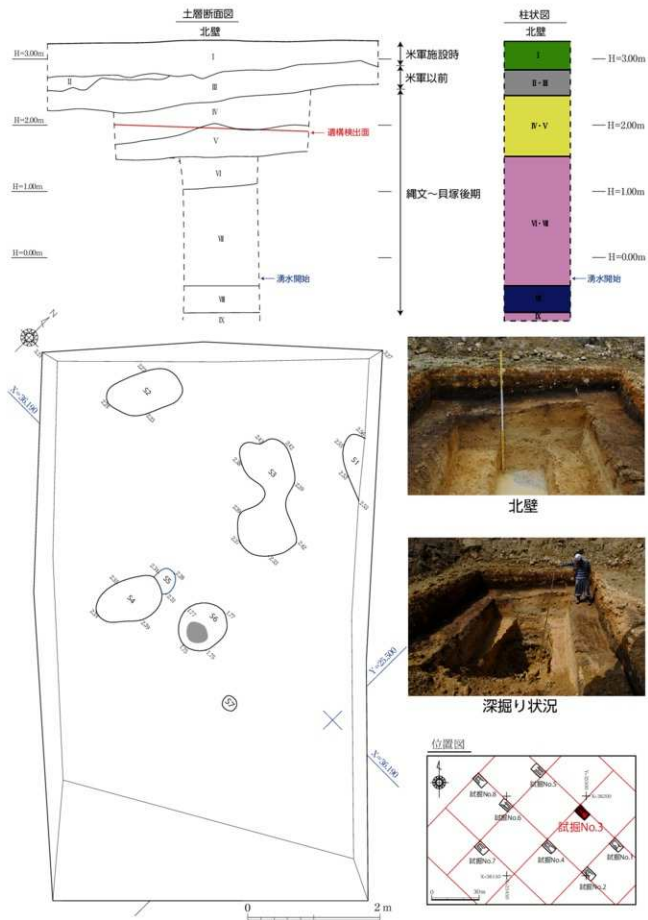
北壁



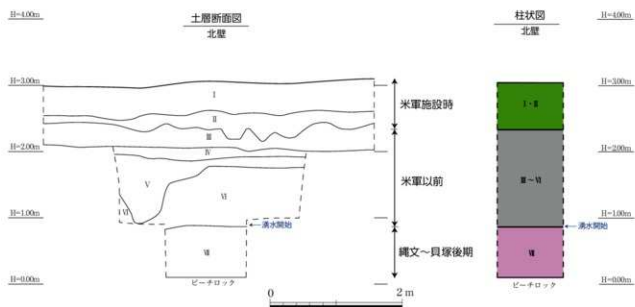
深掘り状況



第9図・図版2 試掘 No.2



第10図・図版3 試掘 No.3



北壁



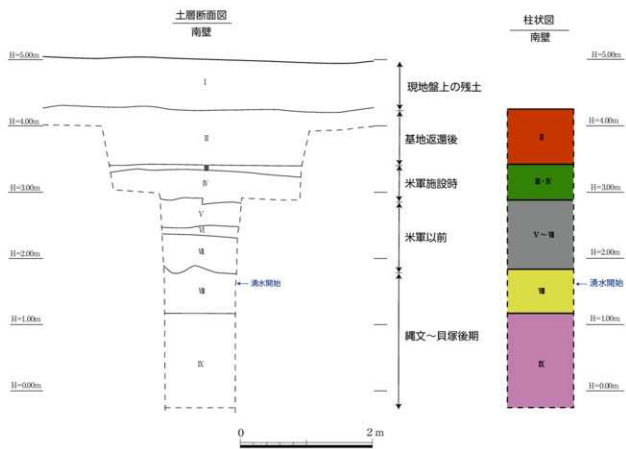
北壁



深掘り状況



第11図・図版4 試掘No.4



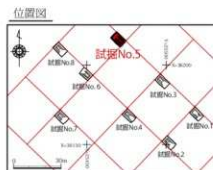
南壁



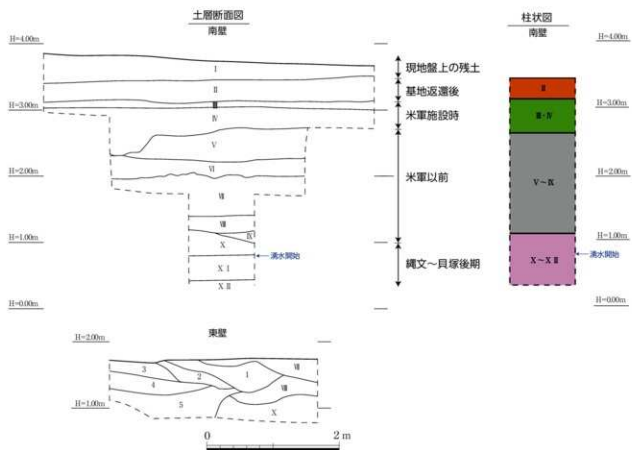
南壁



深掘り状況



第12図・図版5 試掘 No.5



南壁



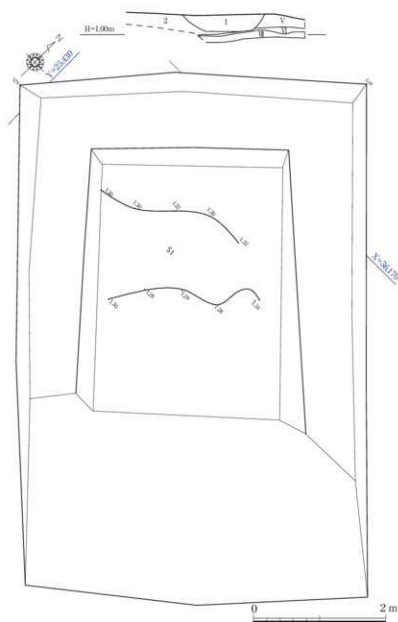
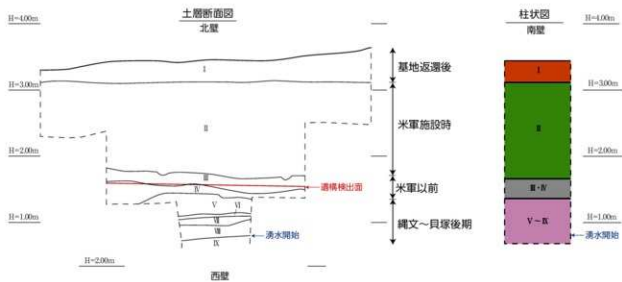
南壁



深掘り状況



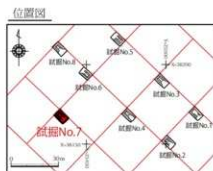
第13図・図版6 試掘 No.6



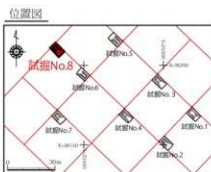
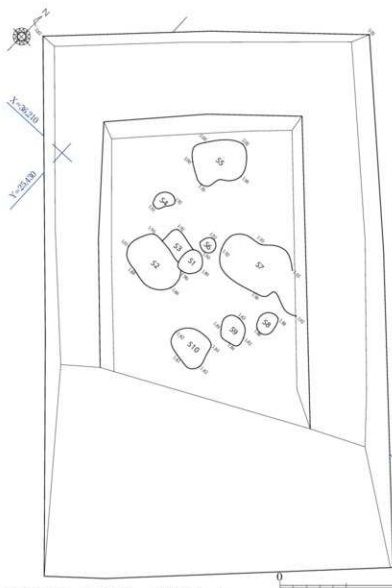
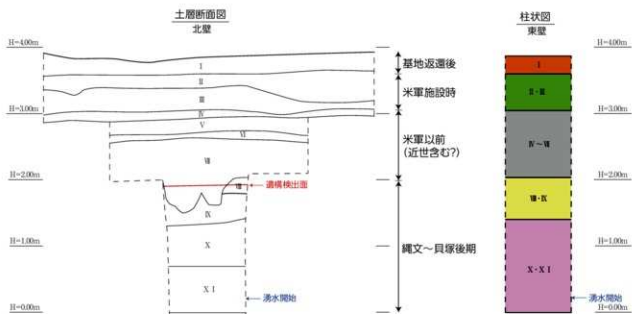
北壁



深掘り状況



第 14 図・図版 7 試掘 No. 7



第15図・図版8 試掘No.8



## 第2節 出土遺物

本節では、試掘調査で得られた出土遺物について紹介する。出土遺物は総数317点あった。内訳は、土器86点、青磁8点、褐軸陶器3点、染付14点、本土産陶磁器34点、沖縄産施軸陶器41点、沖縄産無軸陶器83点、陶質土器10点、円盤状製品3点、石器3点、貝製品1点、銭貨1点、鉄製品1点、鉄滓2点、軽石製品1点、瓦・煉瓦12点、動物遺体35点、貝類遺体85点である。得られた遺物の時期を概観すると、貝塚時代早期、貝塚時代後期、グスク時代、近世～戦前の四時期に大別することができる。出土遺物の集計表は第10表に示した。以下、各遺物について項目毎に紹介する。

### 1. 土器

土器は総数86点出土し、時期毎に分類した。各類の出土点数は、貝塚時代早期2点（Ⅰ類）、貝塚時代後期75点（Ⅱ類）、不明9点（Ⅲ類）であった。Ⅲ類の中にはグスク土器と思われる資料も含まれる。部位別に見ると、口縁部6点、胴部70点、底部9点、不明1点である。全体的に小片で全形を窺い知れる資料はないが、概ね甕形を呈するものと考えられる。一括土器や復元可能な土器は得られなかったが、異なる試掘坑から出土した土器の接合が可能な資料が認められた。特徴的な遺物については実測を行った。以下、実測資料について記述する。なお、実測図を第16図に、写真資料を図版9に、観察一覧を第11表に、出土状況を第12表に示した。

Ⅰ類（第16図1、2）は、貝塚時代早期の土器である。図1は曾畑式土器の口縁部資料である。口唇部に刻目文を施し、表面は縦位の裏面は縦位後に斜位の条痕を施す。図2は曾畑式土器と思われる胴部片である。小片の為判然としないが、表面上部に3条の条痕が見られる。

Ⅱ類（第16図3～6、8、10、12～15）は、貝塚時代後期の土器である。図3～6は口縁部資料で、図3は口唇部平坦で口縁部は外反する。胴部へ拡がりながら移行する。内外面とも指頭圧痕が残る。図4は口唇部は舌状で口縁部は外反する。頸部はややくびれ、内外面とも指頭圧痕が明瞭に残るほか、縦横のナデ調整が見られる。図5は口唇部は舌状で口縁部は弱い波状を呈し外反する。頸部のくびれは弱く胴部へストレートに移行する。胴上部にヘラ調整(?)が見られる。図6は口唇部は丸く口縁部から胴部へは直線上で外傾する。内外器面ともナデ調整による細かな擦痕が見られる。図3、5、6は全体的に摩滅している。

図8、10は、胴部片資料である。図8は試掘No.3とNo.8の資料が接合した資料で、器壁は薄く焼成が良い。裏面には細かな擦痕が見られる。図10は表面には黒斑が見られ、裏面にはハケメ調整痕が見られる。裏面の調整痕は、切り合い状況から1単位2～3cm程度と思われる。

図12～15は、底部資料である。図12は胴部から底部にかけての資料で、比較的大粒の混入物を含む。器表面は摩滅している。図13～15はくびれ平底の底部である。図13は外底縁部に粘土を貼り付け、くびれ部分を成形している。図14は外底面を弧状にナデ調整を施している。図15は外底面を直線にナデ調整が施される。外器面は幅1cm程度の単位でナデ(ヘラ?)調整を行っている。

Ⅲ類（第16図7、9、11）は、時期不明の土器である。図7は表表面とも黒斑が見られる。外面は丁寧な調整と指頭圧痕が施されるが、内面は粗雑な仕上がりの為、混入物の白色粒が顕著に見られる。図9は海砂と思われる粗い白色粒を多く含む。器面は摩滅が顕著に見られる。図11は表裏面とも茶褐色を呈し、内部は黒色を呈する。底部は丸底を呈するものと考えられる。

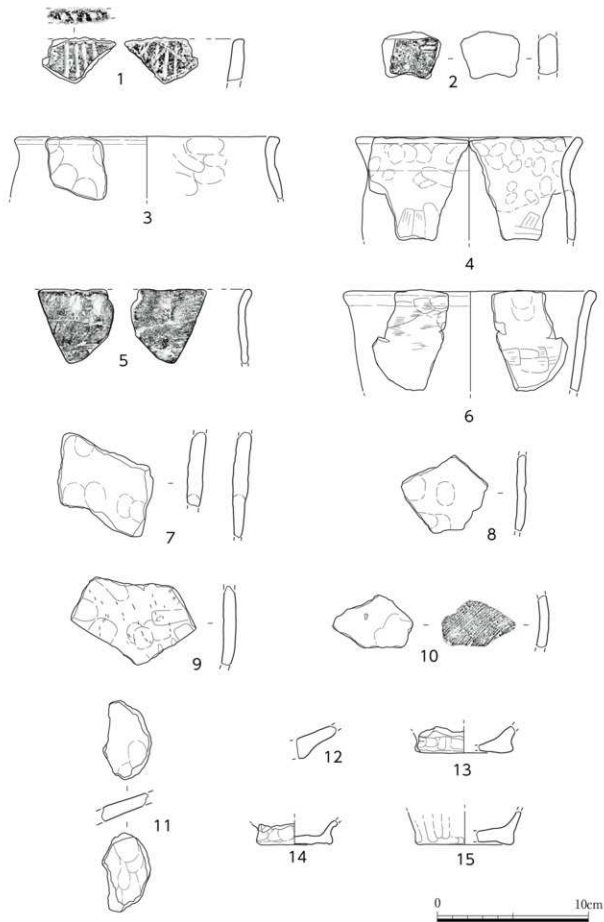


第11表 土器観察一覧

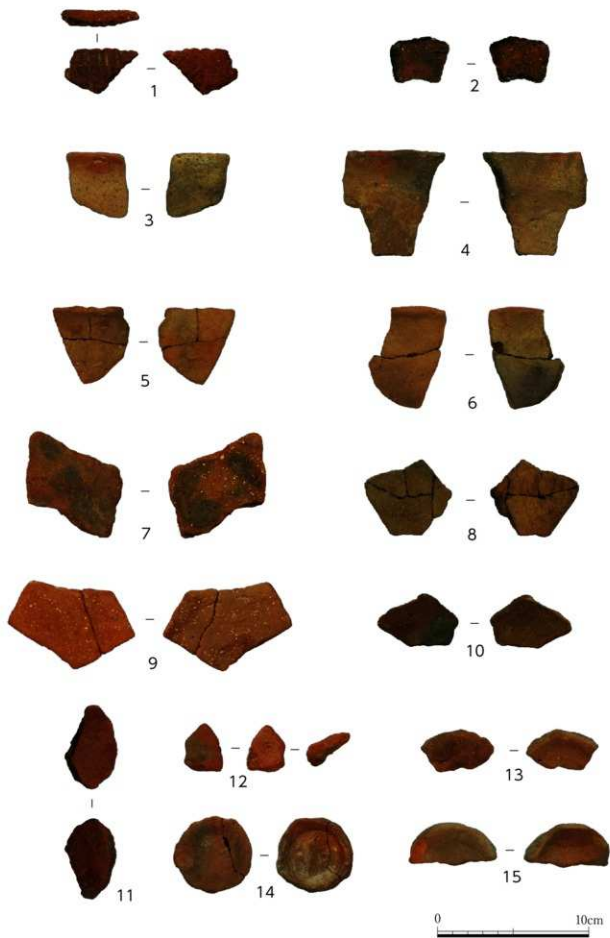
第四版	番号	分類	部位	口径 (cm) 底径 (cm) 器壁 (mm)	形状	文様	泥人物		調整	焼成質	器色	出土地
							種類・量・サイズ (mm)					
第16図 国版9	1	I	口縁部	- 8	口唇部：平 口縁部：直口 底部：-	条痕	種類：付ト、右英・砂粒 量：少 サイズ：1~2	外面：- 内面：-	焼成：良 質：砂	外面：暗茶褐 内面：茶褐	試掘 No.5 Ⅴ層	
	2	I	胴部	- 10	口唇部：- 口縁部：- 底部：-	条痕	種類：付ト、右英 量：多 サイズ：1~3	外面：- 内面：-	焼成：悪 質：砂	外面：暗茶褐 内面：暗茶褐	試掘 No.2 Ⅴ層	
	3	II	口縁部	16.2 3~5	口唇部：平 口縁部：外反 底部：-	無	種類：赤・黒色粒 量：少 サイズ：1	外面：付 内面：付	焼成：良 質：泥	外面：橙灰 内面：灰	試掘 No.2 Ⅴ層	
	4	II	口縁部	15.0 4	口唇部：舌 口縁部：外反 底部：-	無	種類：赤・黒透明粒 量：多 サイズ：0.5~2	外面：付 内面：付	焼成：良 質：泥	外面：淡灰 内面：淡灰	試掘 No.2 Ⅴ層	
	5	II	口縁部	- 4	口唇部：舌・歳状 口縁部：外反 底部：-	無	種類：付ト、赤・黒色粒 量：少 サイズ：0.5~1	外面：付 内面：付	焼成：良 質：泥	外面：橙灰 内面：橙灰	試掘 No.3 Ⅲ・Ⅴ層	
	6	II	口縁部	16.6 6	口唇部：丸 口縁部：外反 底部：-	無	種類：赤・白色粒 量：少 サイズ：0.5	外面：付 内面：付	焼成：良 質：泥	外面：橙灰 内面：赤茶褐	試掘 No.3 Ⅲ・Ⅴ層	
	7	III	胴部	- 8	口唇部：- 口縁部：- 底部：-	無	種類：右英・白色粒 量：多 サイズ：1~3	外面：付 内面：-	焼成：良 質：砂	外面：赤茶褐 内面：赤茶褐	試掘 No.5 Ⅴ層	
	8	II	胴部	- 5	口唇部：- 口縁部：- 底部：-	無	種類：赤・白色粒 量：少 サイズ：0.5	外面：付 内面：付	焼成：普 質：泥砂	外面：暗灰緑 内面：暗灰緑	試掘 No.3 Ⅴ層 試掘 No.8 Ⅴ層	
	9	III	胴部	- 7	口唇部：- 口縁部：- 底部：-	無	種類：白色粒 量：多 サイズ：1~3	外面：- 内面：-	焼成：良 質：泥	外面：淡橙 内面：淡灰緑	試掘 No.7 Ⅴ層	
	10	II	胴部	- 6	口唇部：- 口縁部：- 底部：-	無	種類：白色粒 量：少 サイズ：1	外面：付 内面：付	焼成：良 質：泥	外面：淡茶灰 内面：淡茶灰	試掘 No.3 Ⅳ・Ⅴ層	
	11	III	底付元	- 7~9	口唇部：- 口縁部：- 底部：-	無	種類：付ト、右英・赤色粒量：中 サイズ：0.5~1	外面：- 内面：-	焼成：良 質：砂	外面：茶褐 内面：茶褐	試掘 No.5 Ⅴ層	
	12	II	底部	- 9	口唇部：- 口縁部：- 底部：平	無	種類：付ト、赤色粒 量：少 サイズ：0.5	外面：付 内面：付	焼成：良 質：泥	外面：灰赤 内面：赤粒	試掘 No.2 Ⅴ層	
	13	II	底部	6.4 4	口唇部：- 口縁部：- 底部：平底	無	種類：微砂粒・赤色粒 量：中 サイズ：1	外面：付 内面：付	焼成：良 質：泥	外面：淡灰 内面：橙灰	試掘 No.3 Ⅲ層	
	14	II	底部	5.0 6	口唇部：- 口縁部：- 底部：平底	無	種類：赤色粒 量：少 サイズ：1	外面：付 内面：付	焼成：良 質：泥	外面：淡灰橙 内面：淡灰橙	試掘 No.3 Ⅲ層	
	15	II	底部	6.4 6	口唇部：- 口縁部：- 底部：平底	無	種類：微砂粒・赤色粒 量：少 サイズ：0.5	外面：付 内面：付	焼成：良 質：泥	外面：淡灰 内面：淡橙	試掘 No.3 Ⅲ層	

第12表 土器出土量

分 類	I期		II期				III期			合計	試掘 合計	
	曾畑		後期		くびれ平底	浜屋原?	くびれ?	テラ?				
	口縁部	胴	口縁部	胴	底付近	不明	底	底付近	底			胴
試掘 No.1	II				1						2	3
	III				5	1						8
試掘 No.2	IV		1									1
	V				2							2
	Ⅵ		1	1			1					3
	Ⅶ・Ⅷ				1							1
試掘 No.3	Ⅷ			6						1		7
	Ⅷ		2				3					5
	Ⅷ・Ⅸ		1	13			1					15
	V				7							7
試掘 No.4	Ⅹ				8							8
	Ⅹ				4							4
試掘 No.5	Ⅹ	1			1			1			1	7
試掘 No.6	X以下				3							3
試掘 No.7	V									4		4
試掘 No.8	Ⅹ				1							1
	Ⅹ以下				8							8
	S9				1							1
	X I				1							1
合計		1	1	5	62	1	1	6	1	1	7	86
種別合計		2		5	69		6	1	1	7		



第16図 土器



図版9 土器

## 2. 青磁

今回の調査で出土した青磁は8点で完形はなく全て破片である。器種は、碗が6点（口縁部1点、胴部3点、底部2点）皿が2点（口縁部1点、底部1点）である。

試掘坑別に出土遺物をみると試掘 No. 1 のⅡ a 層から2点、Ⅱ b 層から1点、試掘 No. 3 の遺構 S 1 から1点、試掘 No. 4 のⅢ層から1点、試掘 No. 6 のⅤ・Ⅵ層から2点、試掘 No. 8 のⅣ層下から1点の出土である。

図4は、高台の部分のみの資料で底径も小さく底部の中心部の厚みも薄いが、器種は皿と考えられる。畳付け及び高台内まで軸が掛けられているが、軸の状態は悪く高台のつくりも雑である。

図3は、碗の底部で底径は小さいが高台は高さがある。素地は焼きが悪く欠損した断面から焼きムラが確認できる。軸は薄く高台まで垂れるが畳付けまで至らず又、畳付けの幅は一定していない。外面の腰部に蓮弁文の痕跡が二本みられる。見込み部分の文様は印花文と思われる。

図1は、碗の口縁部で、やや内湾きみである。口縁部の文様は施文のくずれた雷文帯で、その下にやや斜め方向に一本の蓮弁文の一部がみられる。素地の程度は良く、軸も丁寧に仕上げられている。

図2は胴下、腰部にあたる部位と思われる。素地は焼きムラが断面からみられ軸は厚いが素地の状態の悪さが影響しているようだ。外面に文様はみられず内面に型押の花弁の一部と思われるものが確認できる。

以上、器形の判明できる資料、文様の見られるもの4点を第17図1～4、図版10 1～4に図示し、図版外の遺物を含めた個別の観察記述を第13表に示した。

第13表 青磁観察一覧

第四 図版	図 番号	器 種	部 位	口 径 器 高 台 径 (cm)	重 量 (g)	口 縁 形 態 底 部 特 徴	文 様 ・ 外 / 内 施 文	素 地	軸 色 貫 入	軸 軸	備 考	出 土 地
第 17 図 ・ 図 版 10	1	碗	口縁部	15.0 — —	9	内 湾	雷文帯・蓮弁文 / 凸文 ヘラ	灰青色	緑青色	口縁部 内外面	15C ~	試掘 No. 4 皿類
	2	碗	胴部	計測不可 — —	20.2	不 明	なし / 花卉 型押	灰色～赤褐色	暗緑色 貫入あり	胴部 内外面	1 6C 使ムラあり	試掘 No. 6 Ⅴ・Ⅵ層
	3	碗	底部	— — 4.9	66.1	—	蓮弁文 / 印花文 型押	黄白色～灰色	黄緑色 貫入あり	軸は畳付け になし	1 6C 使ムラあり	試掘 No. 1 Ⅱ b 層
	4	皿	底部	— — 5.8	37.8	軸の目輪測り	不 明	灰色	暗緑色	見込み及び 高台内	軸 薄	試掘 No. 1 Ⅱ a 層
図・図版なし	碗	胴部	計測不可 — —	26	不 明	無文 / 無文	黄白色～灰色	灰緑色	胴部 内外面	使ムラあり	試掘 No. 6 Ⅴ・Ⅵ層	
図・図版なし	皿	口縁部	計測不可 — —	2	外 反	不 明	灰白色	淡灰色	口縁部 内外面	——	堂州堂系	試掘 No. 8 Ⅳ層下
図・図版なし	碗	胴部	計測不可 — —	1	細片 - 不明	無文 / 無文	赤褐色	灰白色	胴部 内外面	軸 薄	——	試掘 No. 3 S 1
図・図版なし	碗	底部	—	28.2	高台	— / —	灰白色	灰白色	不明	——	——	試掘 No. 1 Ⅱ a 層

## &lt;参考文献&gt;

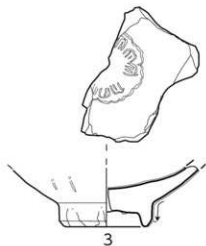
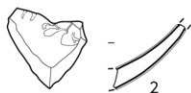
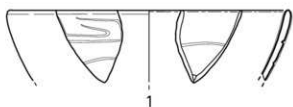
註1 沖縄県文化財調査報告書 第132集

首里城跡 - 京の内跡発掘調査報告書(Ⅰ) - 平成10年(1998年)3月 沖縄県教育委員会

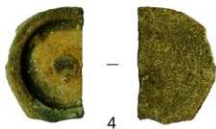
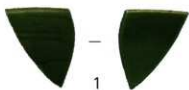
註2 重要文化財指定記念 特別企画展

首里城京の内展 - 貿易陶磁からみた大交易時代 - 2001年 沖縄県立埋蔵文化財センター

註3 貿易陶磁研究 NO. 1 - NO. 5 (合本) 復刻版 日本貿易陶磁研究会 1998年 六一書房



第 17 図 青磁



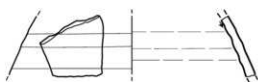
図版 10 青磁

### 3. 褐釉陶器

褐釉陶器が3点得られた。いずれも胴部の小破片で、形状のわかる1点を図示した。

第18図、図版11に示した胴部片は壺と思われる。外面と内面の上部に褐釉が施され、内面下部は無釉である。両面ともにロクロ痕が顕著である。器厚4mm、重量7.97g、試掘No. 2 V層出土。

掲載されていない2点についても壺の胴部片と思われ、外面、内面に褐釉が施され、試掘No. 4 III層出土。1点については沖縄産無釉陶器の可能性も考えられる。試掘No. 2 IV・V層出土。



第18図 図版11 褐釉陶器

### 4. 染付

染付は碗12点、皿1点、香炉1点の計14点出土した。出土地は、試掘No.1～3・5・6・8。試掘No. 1では2点、試掘No. 2で4点、試掘No. 3で1点、試掘No. 5で1点、試掘No. 6で3点、試掘No. 8で3点である。

出土状況を第14表、遺物は第19図、図版12に示した。以下、器種ごとに述べる。

#### (1) 碗

口縁部7点、胴部3点、底部2点の計12点の出土である。

口縁部は外反口縁と直口口縁である、胴部はほぼ直線的に開くと見られる。底部は内底に蛇の目軸剥ぎや削りが見られる。文様は草花文、タコ唐草文、山水文、コンニャク版花文などが見られる。

##### ① 口縁部

第19図1・2は外反口縁で、図1は外面に草花文と圏線を1本を施す。呉須の発色は濃い。図2は外面にタコ唐草文、内面に圏線を1本施す。図3～6は直口口縁で、図3は外面に草花文と圏線を1本施し、内面に圏線を1本施す。呉須の発色はやや淡い。口径は約11cmを測る。図4・5は呉須の発色はやや淡い。福建広東系と思われる。図4は外面の文様は名称不明、内面に圏線を1本施す。呉須の発色はやや淡い。図5は外面の文様は名称不明、内面に圏線を1本施す。呉須の発色はやや淡い。図6は外面の文様は名称不明、圏線を1本施す。呉須の発色は濃い。

##### ② 胴部

図7は外面に草花文、内面は内底に圏線を1本を施す。呉須の発色はやや淡い。図8は外面に山水文、内面は轆轤痕が見られる。呉須の発色は濃い。図9は外面に草花文、内面は圏線を1本施し、内底に削りが施され釉境付近に細い溝が1本見られる。

##### ③ 底部

図10は外面にコンニャク版花文、内面は袖止まりの上位に釉溜がある。内底は蛇の目軸剥ぎが施される。底径8.6cm。図11の外面は高台下部に釉境があり畳付に達していない。畳付は無釉である。底径4.2cm。



## (2) 皿

底部1点の出土である。

図12は底部で、内底に唐草文を施す。呉須の発色は濃い。畳付は無釉。底径7cmを測る。

## (3) 香炉

香炉1点の出土である。

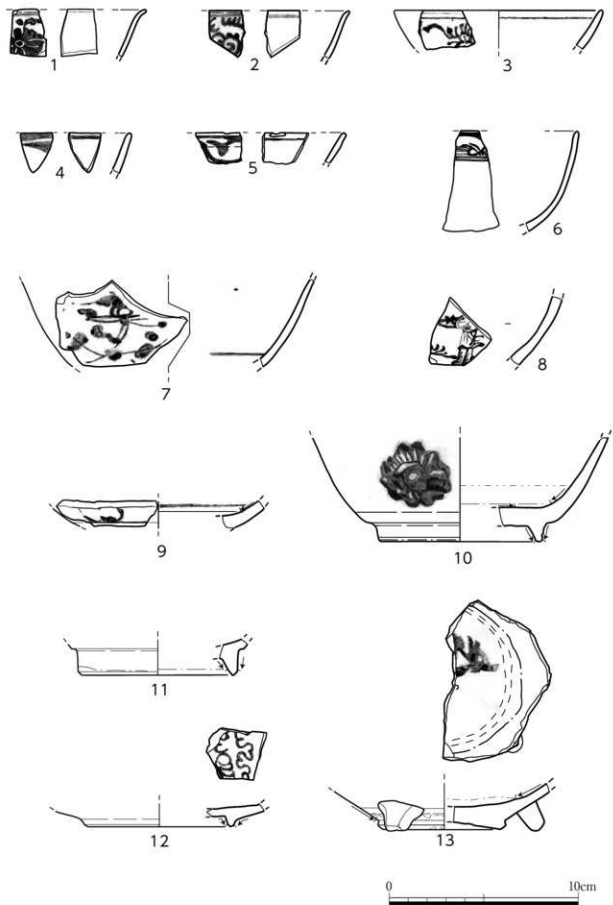
図13は香炉の底部で、脚は施釉される。脚付近に釉境があり高台は露胎するが、畳付に達する釉垂れも見られる。高台内には薄く白土が施される。内底は無釉で、重ね焼きの痕と墨書?が見られる。底径6.4cm。

第14表 染付出土量

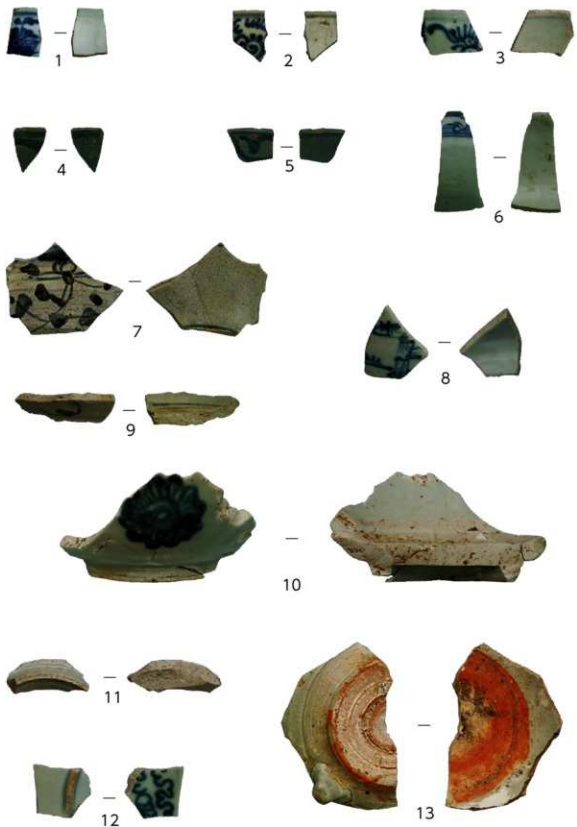
出土地	器種	碗				皿	香炉	合計	遺構別計
		外反口	直口						
		口	口	胴	底				
試掘 No.1	II a	1			1			2	2
試掘 No.2	IV・V	1	2			1		4	4
試掘 No.3	皿			1				1	1
試掘 No.5	V・VI		1					1	1
試掘 No.6	V・VI		1				1	1	3
	皿			1			1	2	
試掘 No.8	IV F				1			1	3
	S4			1				1	
	S9		1					1	
合計		2	5	3	2	1	1	14	14
器種別計			12			1	1	14	

第15表 染付観察一覧

第四図版	図番号	器種	部位	口径 (cm) 底径 (cm) 重量 (g)	観察一覧	出土地
第19図、 図版12	1	碗	口縁部	口径：- 重量：2.22	外反口縁。文様：外面・草花文、口縁上部に團扇1本。素地・乳白色。器厚・2mm。	試掘 No.2 IV・V層
	2	碗	口縁部	口径：- 重量：2.25	外反口縁。様：外面・タコ唐草文。内面・口縁上部に團扇1本。素地・乳白色。器厚・2～3mm。	試掘 No.1 II a層
	3	碗	口縁部	口径：11.0 重量：4.62	直口口縁。文様：外面・草花文、口縁上部に團扇を1本施す。内面・口縁上部に團扇1本。素地・乳白色。器厚・3mm～4mm。	試掘 No.2 IV・V層
	4	碗	口縁部	口径：- 重量：2.06	直口口縁。文様：外面・草花文?。内面・口縁上部に團扇1本。福建広東。素地・淡灰色。器厚・3mm～4mm。	試掘 No.2 IV・V層
	5	碗	口縁部	口径：- 重量：2.41	直口口縁。文様：外面・?。内面：口縁上部に團扇1本。福建広東。素地・淡灰色。器厚・2.5mm。	試掘 No.8 S9
	6	碗	口縁部	口径：- 重量：8.35	直口口縁。文様：外面・龍?内面・無文。素地・乳白色。器厚・3～4mm。	試掘 No.6 V・VI層
	7	碗	胴部	胴径：- 重量：15.24	文様：外面・草花文。内面・内底に團扇1本。素地・淡灰色。器厚・2～4mm。	試掘 No.6 Ⅵ層
	8	碗	胴部	胴径：- 重量：8.6	文様：外面・山水文。内面・無文。素地・乳白色。器厚・4～6mm。	試掘 No.3 Ⅵ層
	9	碗	胴部	底径：7.6 重量：11.26	文様：外面・草花文。内面・内底無釉、内底に團扇1本。福建広東。	試掘 No.8 S4
	10	碗	底部	底径：8.6 重量：85.38	文様：外面・コンニャク版花文。外底畳付け無釉。内面・内底蛇の目軸測ぎ。福建広東。素地・乳白色。器厚・4～9mm。底部で10mm。	試掘 No.6 Ⅵ層
	11	碗	底部	底径：4.2 重量：10.36	文様：外底畳付け無釉。内底：蛇の目軸測ぎ。素地・淡灰色。器厚・4mm。	試掘 No.8 IV層下
	12	皿	底部	底径：7.0 重量：7.53	文様：外底畳付け無釉。内底：唐草文。素地・乳白色。器厚・4～6mm。	試掘 No.2 IV・V層
	13	香炉	底部	底径：6.4 重量：63.71	文様：外底畳付け無釉。内底：文様?無釉。素地・黄白色。器厚・4～8mm。	試掘 No.6 Ⅵ層



第19図 染付



図版 12 染付

## 5. 本土産陶磁器

本土産陶磁器が総数34点出土した。器種を見ると、碗が13点と最も多く、中には全形を窺える資料も得られた。戦前、沖縄でかなり流布した通称「スンカイマカイ」と呼ばれていた碗がほとんどである。次いで小碗が8点と続く。他には皿・急須・蓋・器種不明が僅かに得られ、第16表に出土状況を示した。文様を見ると、碗は型紙摺り、小碗には銅板転写や飛焼を施したクロム青磁が見られる。図7の皿は、同一個体に型紙摺りと銅板転写の二種の技法を用いている。皿内面の口縁上部には、型紙摺りによって菱形文が描かれ、型紙の境目が明確である。内底は銅板転写による草花文が描かれている。未報告の皿も同様な技法を用いる。皿の外表面は出土した3点とも無文である。急須は2点得られた。図8の急須は、本土産磁器の口縁部で、外面に圈線と草花文らしき文様が見られる。図9は本土産陶器の急須で、常滑焼の口縁部である。主なものを第20図に図示し、報告遺物の詳細は、それぞれ器種別に観察一覧表に記述した。

## &lt;参考文献&gt;

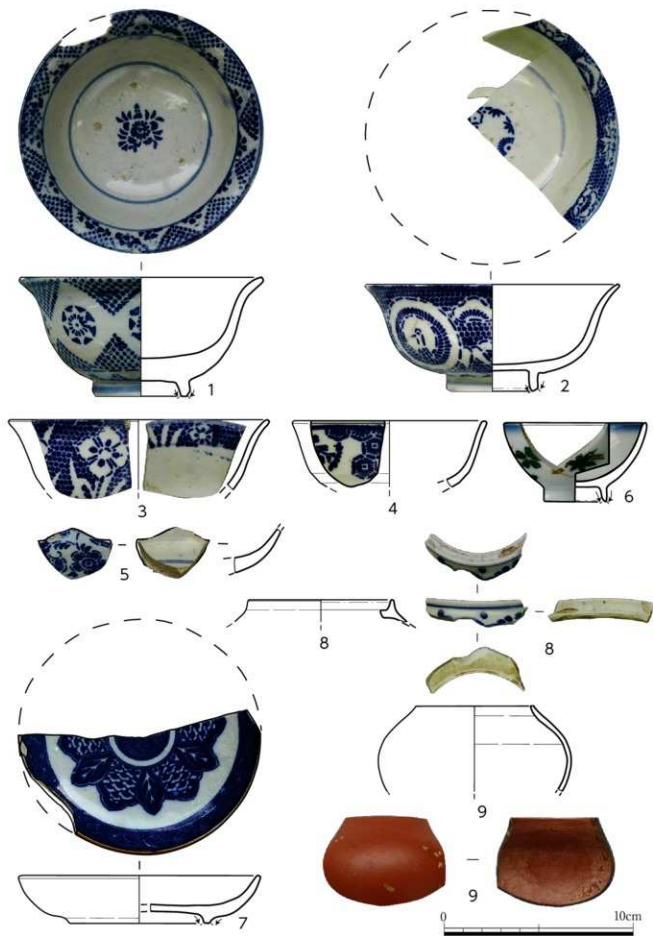
下中 弘、『やきもの辞典』平凡社 1984

第16表 本土産陶磁器出土量

器種 出土地	碗				小碗				皿		急須	蓋	不明	合計	試掘坑別計							
	型紙		タロム		型紙	銅版	タロム		銅版													
	口~底	口 胴	底近	胴 底近	口	口	口~底	底	口~底	口	口~底	底	口			胴						
試掘 No. 1	Ⅱ		2		1							1		3	7	15						
	Ⅱ a	1	1	1	1						1				5							
	Ⅱ b		1									1			2							
試掘 No. 2	Ⅳ・V	1		1				1	1	1				1	7	7						
	Ⅲ		1				1			1		1			4	4						
試掘 No. 3	Ⅲ					1									1	1						
	Ⅲ									1					1	1						
試掘 No. 4	Ⅲ~V	1									1				2	3						
	V~Ⅳ							2							2	2						
試掘 No. 5	V~Ⅳ														1	1						
試掘 No. 6	V・Ⅳ					1									1	1						
不明															1	2						
合計		4	2	4	1	1	1	1	2	1	3	2	1	2	1	6	34					
器種別計																13	8	3	2	1	7	34

第17表 本土産陶磁器観察一覧

第四国版	図番号	器種	部位	種類	口径 底径 器高 (cm)	重量 (g)	観察事項	観察事項
第20図	1	碗	口~底	型紙	129 48 63	290	形状：高台幅から膨らみを持ちながら立ち上がり、口縁部は外反する。文様：外面-口縁部と腰部に点文を扇面状に描き、その間の菱形部を丸文で埋める。高台に圈線。内面-口縁部に点文を扇面状に描き、内底に草花文、圈線有り。内底：日痕五カ所。登付け無軸。	試掘 No. 2 N・V層
	2	碗	口~底	型紙	135 48 563	73.31	形状：高台幅から膨らみを持ちながら立ち上がり、口縁部は外反する。文様：外面-全面に点文を描き、その中に梅・竹・丸文（鶴）を描く。高台に圈線。内面-口縁部に点文を描き、梅・竹を配置。内底に草花文、圈線有り。登付け無軸。	試掘 No. 4 Ⅲ~V層
	3	碗	口~胴	型紙	138 -	11.99	形状：腰部が膨らみを持ち、口縁部は外反する。文様：外面-全面に点文+水輪花文、内面-口縁部に点文+水輪花文。	試掘 No. 1 Ⅱ a層
	4	碗	口~胴	型紙	102 -	9.30	形状：腰部に段を有しながら立ち上がり、口縁部は直口する。文様：外面-圈線+草花文を長線で六角形に囲む、内面-圈線。軸色：灰須。	試掘 No. 3 Ⅲ層
	5	碗	胴	型紙	-	7.5	形状：腰部が膨らみを持つ。文様：外面-全面に草花文、内面-圈線。	試掘 No. 2 N・V層
	6	小碗	口~底	銅板	74 32 42	33.08	形状：腰部が丸みを帯びながら直線的に立ち上がる。文様：草花文（口唇部の内外に灰須軸掛け）。登付け：無軸。	試掘 No. 5 V~Ⅳ層
	7	皿	口~底	銅板	128 74 25	82.90	形状：口縁は直口し、腰部が丸みを帯びる。文様：外面-灰須による菱形文と草花文、内面-無文。登付け：無軸。	試掘 No. 4 Ⅲ~V層
	8	急須	口	-	76 -	63	形状：口縁部は小破片で、口唇は舌状を呈する。文様：外面-圈線+不明、内面-文様無し。蓋受け口と内面は無軸。	試掘 No. 1 Ⅱ b層
	9	急須	口	朱泥	62 -	18.89	形状：口唇部は平らである。弧状で最大径は胴部にあり、口縁部が内増する。文様：両面に朱泥が施され、無文。外面-ナデにより滑らかな手触り。内面-ロク口痕が残る。	試掘 No. 1 Ⅱ層



第20図 本土産陶磁器

## 6. 沖縄産施釉陶器

沖縄産施釉陶器は総数41点が出土し、第19表に出土状況を示す。器種を見ると、碗が18点と最も多く、その他には小碗、壺、瓶等が出土しているが、碗に比べてかなり少ない。試掘No. 2のIV-V層からの出土が12点と多く、次いで試掘No.1のII層で7点、試掘No. 3のIII層と試掘No. 5のV~VII層が6点と続く。いずれもグスク~近世の土壌である黒色土壌からの出土である。全形を窺える資料はなく、全て破片である。その中で特徴的なものを第21図、図版13に図示し、報告遺物の詳細は観察一覧表にそれぞれ記述する。以下、器種ごとに略述する。

### (1) 碗

碗は18点が出土し、形状がわかるものや特徴的な6点を図示した。釉薬の違いにより灰釉碗と白化粧土碗に分類できるが、前者は僅か3点の出土である。

第21図1~3は直口する灰釉碗で、いずれもフィガキーによる灰釉掛けが両面に施されている。図1は口縁部破片で、口径が14.4 cmを測る。下記の2点に比べて外側に直線的に開くタイプである。図3は高台脇が僅かに丸みを持って立ち上がる底部で、畳付は破損している。両面とも鉄釉を施した部分が見られる。図4~6は白化粧土を施し、透明釉を掛けた碗である。3点とも高台脇から若干膨らみながら立ち上がる。図5・6は外面にコバルト釉で文様を描いている。

### (2) 小碗

小碗は口縁部2点、底部2点の計4点が出土し、形状の窺える3点を図示した。底部は、2点とも同じ形状であることから、1点のみを図示する。

図7・8は口縁部で、上端が僅かに外反するものである。図7は灰釉小碗で、外面に鉄釉で文様を描いている。図8は白化粧土を施した後に透明釉を掛けている。図9は底部で、外面は面取りされている。両面とも白化粧土を施した後に透明釉を掛けている。外底には鉄釉が施されるが、畳付は無釉である。内底は蛇の目釉剥ぎが行われ、透明釉のみを剥ぐ。

### (3) 鉢

鉢は、外反する口縁部と胴部がそれぞれ1点ずつ得られた。2点とも黒釉と透明釉の掛け分けである。どちらも小破片のために図示は省略した。口縁部は試掘No.1 II層、胴部は試掘No.5 V~VII層出土。

### (4) 壺

壺は5点出土した。全て小破片のため、図示は省略した。部位は胴部片が主で、耳が1点得られた。胴部片のほとんどが油壺と思われる。

### (5) 瓶

瓶は口頸部が1点、胴部2点の計3点が得られた。口頸部は遺構S 2からの出土であるが、口頸部が破損しており、小破片でもあることから図示は省略した。

### (6) 急須

急須は2点の出土で、図10の底部1点を図示する。円錐状の脚を持つが、本来は3個と思われる。

### (7) 酒器

酒器は図11に図示した1点の出土である。碁笥底の底部で、膨らみを持ちながら立ち上がる。外面は白化粧土を雑に塗った後に透明釉を施し、内面は素地にそのまま透明釉を施す。さらに、外面には、赤絵が加飾されている。

### (8) 火炉

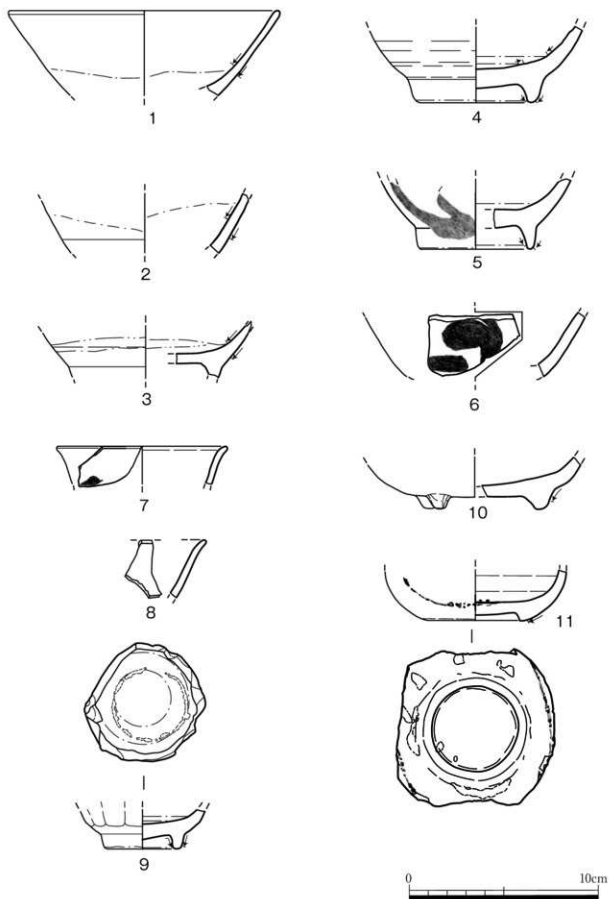
火炉は底部2点と胴部1点の計3点が出土した。小破片のため、図示は省略した。

第18表 沖縄産施釉陶器観察一覧

第IV章 図版	図番号	器種	部位	口径 口径 口径高 (cm)	観察事項	出土地
第21 図版 13	1	碗	口縁部 側部	14.4 — —	形状:高台脇から口縁部へ直線的に立ち上がる直口の灰軸碗。素地:淡黄色。釉色:両面とも灰軸。フィガキによる軸掛け。器厚:3mm。重量:22.60g。	試掘No.8 Ⅴ層
	2	碗	側部	— — —	形状:直線的に立ち上がる直口の灰軸碗。素地:灰色。釉色:両面とも灰軸。フィガキによる軸掛け。器厚:4mm。重量:9.95g。	試掘No.4 Ⅲ層
	3	碗	底部	— — —	形状:高台脇から若干丸みを持ちながら立ち上がる灰軸碗。素地:灰色。釉色:両面とも灰軸。両面とも鉄軸による加飾。フィガキによる軸掛け。器厚:6mm。登付破損。高台脇で推算8.0cmを測る。重量:17.86g。	試掘No.2 Ⅳ・Ⅴ層
	4	碗	底部	— 6.2 —	形状:高台脇から僅かに丸みを持ちながら立ち上がる。素地:淡黄色。釉色:両面とも白化粧後に透明軸(登付けは無軸)。内底:蛇の目軸測ぎ、アルミナ付着。外面はコクロ痕顕著。器厚:5~7mm。重量:67.58g。	試掘No.6 Ⅴ層
	5	碗	底部	— 6.0 —	形状:高台脇から僅かに丸みを持ちながら立ち上がる。素地:淡灰黄色。釉色:両面一白化粧後に透明軸(登付けは無軸)。内底:蛇の目軸測ぎ。文様:外面にコバルト軸(薄)で施文。器厚:7mm。重量:68.20g。	試掘No.3 Ⅲ層
	6	碗	側部	— — —	形状:腰部が僅かに丸みを持ちながら立ち上がる。素地:淡黄色。釉色:白化粧後に透明軸。文様:外面にコバルト軸濃い)で施文。器厚:5mm。重量:9.51g。	試掘No.2 Ⅳ・Ⅴ層
	7	小碗	口縁部	8.8 — —	形状:口縁部上端が僅かに外反する。素地:淡灰色。釉色:両面とも灰軸。文様:外面に鉄軸で施文。器厚:3mm。重量:3.36g。	試掘No.1 Ⅱb層
	8	小碗	口縁部	— — —	形状:口縁部上端が僅かに外反する。素地:灰色。釉色:両面とも白化粧後に透明軸。器厚:3mm。重量:2.32g。	試掘No.2 Ⅳ・Ⅴ層
	9	小碗	底部	— 4.2 —	形状:外面は面取りのために腰部で僅かに稜を作る。素地:灰色。釉色:両面とも白化粧後に透明軸。(登付けは無軸)内底:蛇の目軸測ぎ。(アルミナ付着)器厚:5mm。重量:54.55g。	試掘No.2 Ⅳ・Ⅴ層
	10	急須	底部	— 6.8 —	形状:底面に円錐状の脚を持ち、丸みを帯びながら立ち上がる。素地:灰色。釉色:両面とも白化粧後に透明軸(外底面と脚底は無軸)。器厚:7mm。底厚:7mm。重量:28.43g。	試掘No.2 Ⅳ・Ⅴ層
	11	酒器	底部	— 4.6 —	形状:碁笥底の底部で、丸みを持ちながら立ち上がる。素地:灰色。釉色:外面一白化粧を施した後に透明軸、内面一白化粧無して透明軸。登付と外底は無軸。文様:外面に赤絵。器厚:4mm。底厚:7mm。重量:95.88g。	試掘No.1 Ⅱb層

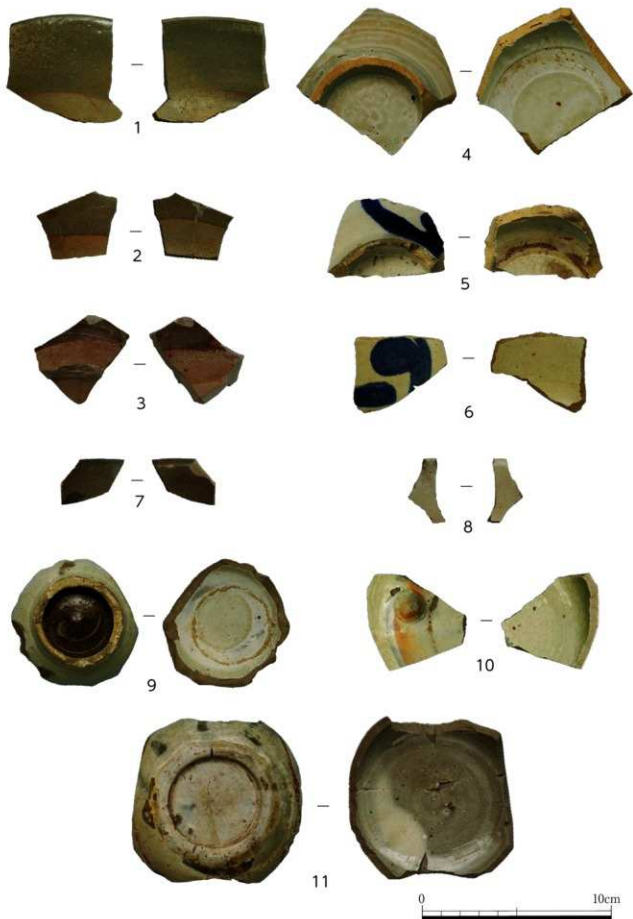
第19表 沖縄産施釉陶器出土量

出土地	器種	碗		小碗		鉢		壺	油壺	瓶	瓶?	急須	酒器	火炉	壺	不明	合計	遺構別計		
		直口	側底	外反	外反L	口	側	側	側	側	側	側	側	側	側	側	側			
試掘No.1	Ⅱ	1	1	1			1										1	7	11	
	Ⅱb													1				2		
試掘No.2	Ⅳ・Ⅴ			3	1	1	2			1			1	1			1	12	12	
試掘No.3	Ⅲ			4	1													6	6	
試掘No.4	Ⅲ			1														1	1	
試掘No.5	Ⅴ~Ⅵ			2				1							1	2		6	6	
試掘No.6	Ⅳ・Ⅴ								1									1	2	
	Ⅵ					1												1		
試掘No.8	Ⅵ			1														1	3	
	S2			1							1							2		
合計		3	11	4	2	2	1	1	1	1	3	1	1	1	1	1	1	2	1	2
器種別計			18		4		2	1	4		3		2	1	3	1	2		41	



第 21 図 沖縄産施釉陶器





図版 13 沖縄産施釉陶器

## 7. 沖縄産無釉陶器

沖縄産無釉陶器が総数83点出土した。器種別にみると鉢が23点、壺が21点と多数出土し、その他には瓶や甕等が僅かに得られた。層序をみると、試掘No. 1のⅡ層で20点と最も多く、次いで試掘No. 2のⅣ・Ⅴ層、試掘No. 6のⅦ層、試掘No. 5のⅤ～Ⅶ層からの出土が多い。出土状況は第21表に示した。第22・23図、図版14・15に特徴的なものを取り上げ、器種ごとに報告する。詳細はそれぞれ観察一覧表に記す。

### (1) 壺

壺は21点を得られ、6点を図示した。

第22図1・2は口縁部で、両者とも口唇部は丸みを帯び、カマボコ状肥厚となる。同図3～6は底部で、前者3点は立ち上がりが直線的であるが、同図6は少し丸みを持って立ち上がる。同図4は底径が7.2cmと小さく、小壺又は瓶の可能性もあり得る。

### (2) 火炉

同図7・8に図示した2点である。両方とも口縁部で、同図8は逆くの字状に屈曲する部分の破片である。

### (3) 鉢

鉢は23点の出土で、そのうち、6点を図示した。

同図9は直口する鉢の口縁部である。

同図10は断面形が逆L字状で、直口する鉢の口縁部である。口唇部の上面に1条の圏線が施される。

同図11～14は播鉢である。播鉢に関しては安里氏らによる共同研究<sup>(註1)</sup>があり、Ⅰ～Ⅳ式に形式分類している。それによると、今回掲載した播鉢はⅠ～Ⅲ式に分類される。報告遺物以外の播鉢を観察すると、Ⅰ～Ⅱ式が多い。

### (4) 甕

甕は底部1点、胴部2点の計3点が出土した。小破片で形状が不明なことから図示は省略する。3点とも厚手で、底部の立ち上がり部には顕著な削り痕がみられる。

### (5) 瓶

瓶は胴部が4点得られ、頸部2点も胴部に含めた。瓶も小破片で形状が不明なことから図は省いた。頸部2点には圏線が施されている。胴部1点には外面に叩き痕がみられる。

### (6) 不明

同図15は不明遺物で、取り敢えず本項で報告する。器厚は5～8mmで、外面には火を受けて黒色を呈する箇所が見られる。石英や黒色粒、白砂粒などを多量に混和する特徴がある。外面には調整痕が明瞭に残っている。試掘No. 3 Ⅳ・Ⅴ層出土。

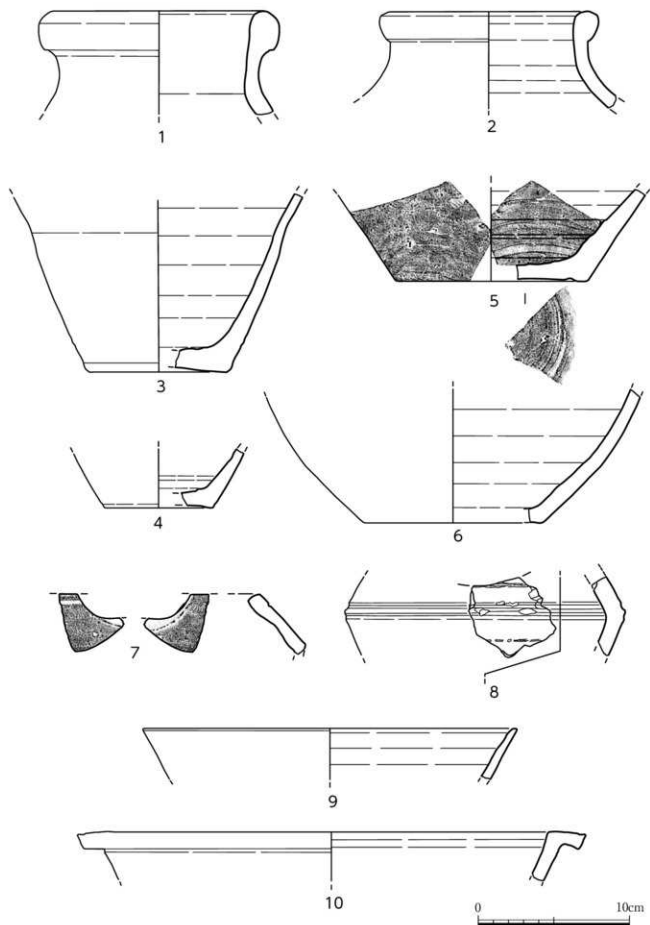
註1：名護博物館紀要・3「あじま」『播鉢編年からみた近世琉球窯業の展開』p 79 安里進・上原政昌  
・家田淳一

第20表 沖縄産無釉陶器観察一覧

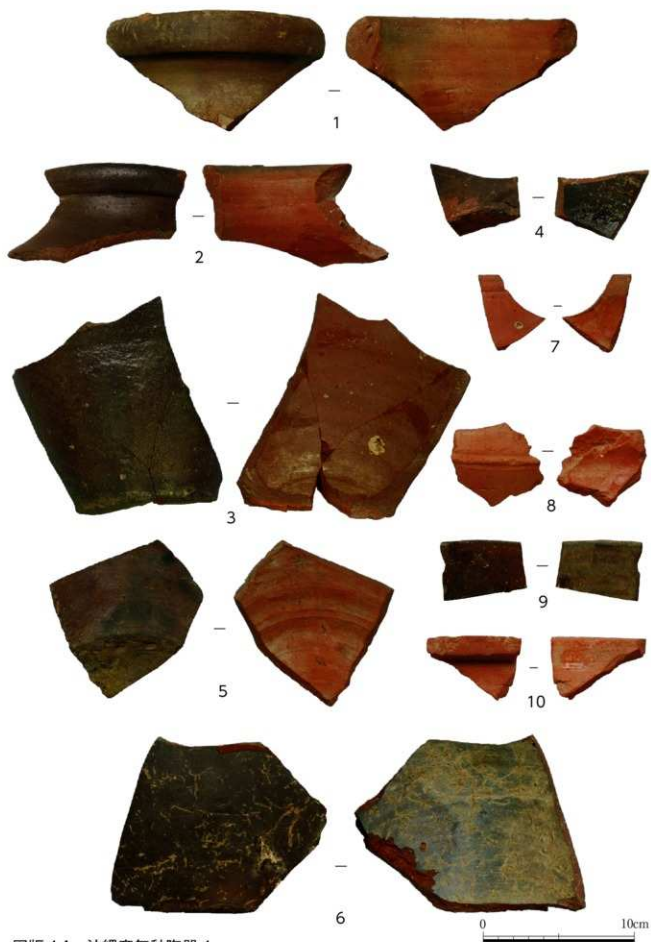
第四国図表	図番号	器種	部位	口径 底径 器高 (cm)	観察事項	出土地
第22 -22 四・ 四 図 14 ・ 15	1	壺	口縁部	160 — —	形状:玉縁状の肥厚口縁、撫肩。素地:褐色。器色:外面-暗褐色、内面-茶褐色。焼成:良好。混和材:赤色粒、白色粒。重量:233g。	試掘No.1 II層
	2	壺	口縁部	142 — —	形状:玉縁状の肥厚口縁、撫肩。素地:褐色。器色:外面-暗褐色、内面-茶褐色。焼成:良好。混和材:赤色粒。重量:112.82g。	試掘No.3 III層
	3	壺	底部	90 — —	形状:底面から直線的に立ち上がる。外面には泥輪(光沢)、気泡有り。焼成:良好。器色:外面-暗褐色、内面-暗褐色。混和材:黒色粒、白色粒。内面:轆轤頭顕著。重量:299g。	試掘No.4 III-V層
	4	壺	底部	128 — —	形状:底面から直線的に立ち上がる。焼成:良好。器色:外面-暗褐色、内面:茶褐色。内面に轆轤頭顕著。外面の底面近くに割り肌。混和材:赤色粒。重量:194g。	試掘No.1 II a層
	5	壺	底部	72 — —	形状:小振りで、底面から直線的に立ち上がる。焼成:良好。器色:内外面とも暗褐色。素地:暗茶褐色。混和材:石英、赤色粒。外面の底部近くにへう割り肌。重量:39.8g。	試掘No.6 V層
	6	壺	底部	12 — —	形状:底面から胴部にかけて膨らみを持ちながら立ち上がる。焼成:良好。器色:外面-暗褐色、内面-青灰褐色。素地:褐色。混和材:石英、赤色粒。重量:265g。	試掘No.1 II b層
	7	大が	口縁部	— — —	形状:口唇は平ら。壺を持つ。文様:幅2mmの圓線1条。素地:茶色。焼成:良好。器色:内外面-茶色。混和材:茶・白粒。重量:16.17g。	試掘No.2 IV-V層
	8	大が	口縁部	— — —	形状:逆くの字状に屈曲。意有り。屈曲の上下に4mm程の圓線が1条ずつ。焼成:良好。素地:橙褐色。器色:内外面-橙褐色。混和材:黒・白粒。重量:37.44g。	試掘No.6 V-V層
	9	鉢	口縁部	247 — —	形状:外縁する直口口縁。素地:暗茶褐色。器色:内外面-暗褐色。焼成:良好。混和材:白・黒色粒。器面調整:両面とも指圧肌、へう肌。重量:20.49g。	試掘No.6 V層
	10	鉢	口縁部	288 — —	形状:外縁する直口口縁。口唇幅2.5cm、逆L字状。断面形は四角形。文様:口唇に幅1.5mmの圓線が1条。素地:橙褐色。器色:内外面-橙褐色。重量:38.83g。	試掘No.5 V-V層
	11	播鉢	口～ 底部	304 102 144	形状:口縁部を作る際に来た屈曲部と、その下部に回転様ナデによって出来る屈曲部が凸帯となる。口唇幅は18cmで、口縁端は四角い。注口有り。素地:茶色。器色:内外面-赤茶色。焼成:良好。混和材:石英、赤・黒色粒。カキ目:口縁上端から2cm部分はナデによってカキ目消し。カキ目数:7本1組。カキ目溝:1.5～2mm幅。カキ目放射状(1.5cm前後開け)。器面調整:ナデ。播鉢編年I式。	試掘No.5 V-V層
	12	播鉢	口縁部	247 — —	形状:口縁部にくびれ部分があり、稜を作る。口唇幅は14cmで、口縁端は丸い。素地:暗茶褐色。器色:外面-赤茶褐色(若干光沢)、内面-茶褐色。焼成:良好。混和材:石英、赤・黒色粒。カキ目:口縁上端から1.5cm部分はナデによってカキ目消し。カキ目数:日本1組。カキ目溝:1～1.5mm幅。カキ目放射状(1.5cm前後開け)。器面調整:ナデ。播鉢編年I式。	試掘No.6 V層
	13	播鉢	底部	90 — —	形状:底面から僅かに丸みを帯びて一端窄まり、それから外側に開く。素地:茶褐色。器色:内外面-茶褐色。焼成:良好。混和材:石英、白・赤色粒。カキ目:口縁上端はナデによりカキ目消し。カキ目溝:1～2mm幅。カキ目数:10本1組。カキ目放射状(開隔開け)。器面調整:ナデ、外面の底部下部は割り肌。播鉢編年I or II式。	試掘No.5 V-V層
	14	播鉢	底部	120 — —	形状:底面から僅かに丸みを帯びながら外側に開く。素地:暗褐色。器色:内外面-暗褐色(外面はやや光沢)。光沢は見られず。焼成:良好。混和材:白・黒色粒。カキ目溝:1～1.5mm幅。カキ目数:6本1組。カキ目重復。器面調整:ナデ。外面に多数の気泡が見られるが、潰れずアタタキにならない。播鉢編年III。	試掘No.1 IIIa層
	15	不明	胴部	— — —	器厚:5～8mm。器色:外面-赤褐色、内面-灰茶褐色。混和材:石英、黒色鉱物、砂粒。器面調整:外面-F調整(条痕明瞭)、内面-条痕・指圧肌。	試掘No.3 IV-V層

第21表 沖縄産無釉陶器出土量

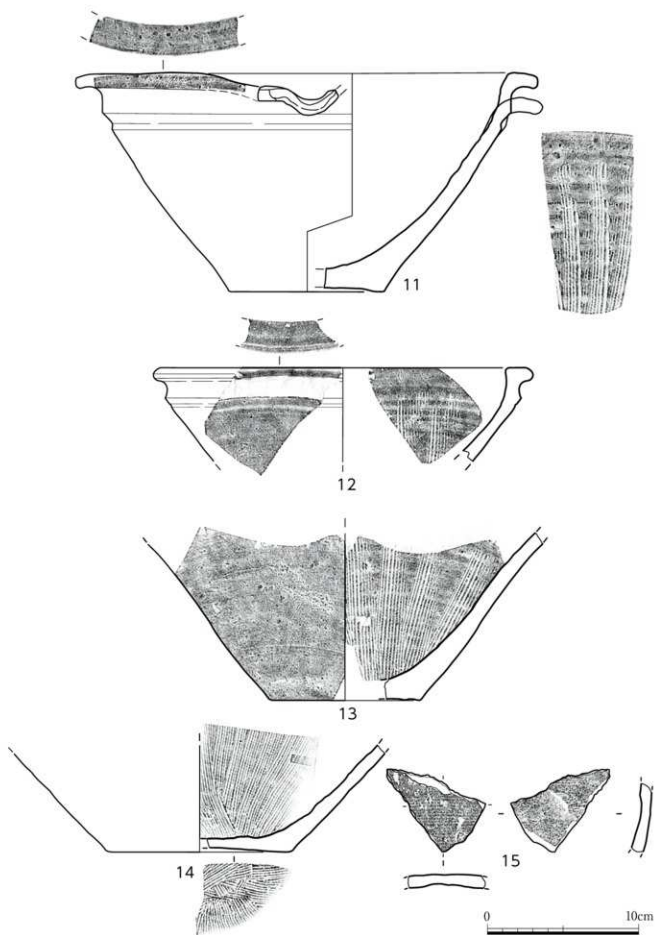
出土地	器種	壺		大が	鉢				甕	瓶	不明	合計	試掘別計	
		口	胴		底	鉢								
						口～底	口	胴						底
試掘No.1	II	1	6				1	1			1	10	20	
	II a			1									1	
	II a II b			1									2	
試掘No.2	III						1	1			1	3	3	
	IV・V	1	1	1						1	8	12	14	
試掘No.3	V						1				1	2	4	
	III	1	2					1			1	4	4	
	S1										1	1	1	
	S2										1	1	1	
試掘No.4	S3										1	1	1	
	III						1	1				2	3	
試掘No.5	III～V	1	1									2	2	
	V～VI	1			1		1	1	2	1	3	10	10	
試掘No.6	V・VI	3	1	1			1	1	1	1	7	7	7	
	VI			1	1	5	1	1		1	3	12	19	
試掘No.8	V						1	1				2	2	
	VI						1	1				2	4	
	S2										1	1	1	
合計	3	14	4	2	1	3	10	4	2	3	2	4	30	
器種別計	21		2				23		3	4	30		83	



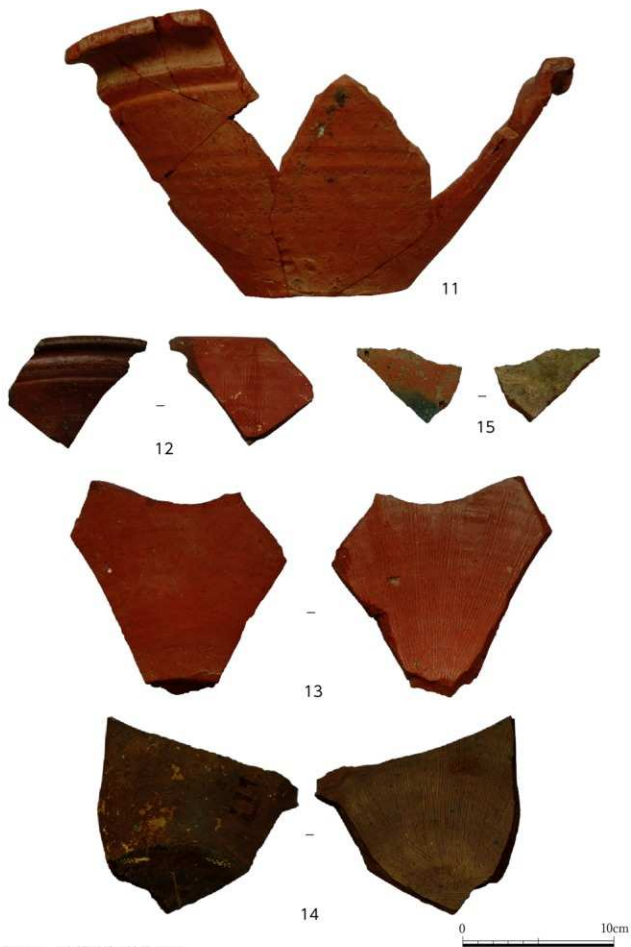
第22図 沖縄産無釉陶器 1



図版 14 沖縄産無釉陶器 1



第23图 沖縄産無釉陶器2



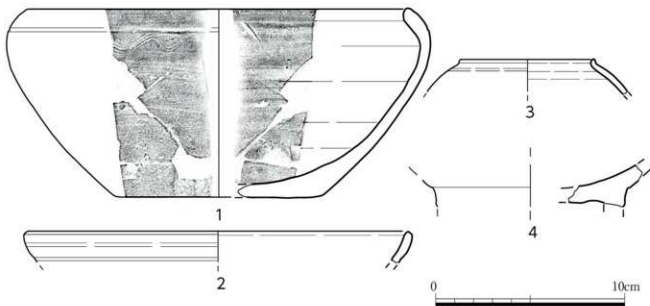
図版 15 沖縄産無釉陶器 2

## 8. 陶質土器

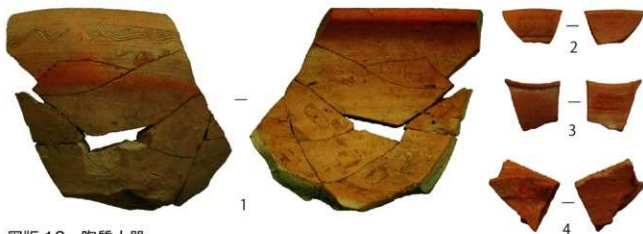
陶質土器が10点出土した。器種をみると鉢、鍋、急須、火炉が見られ、形状が分かる4点を第24図、図版16に図示した。図1は口縁～底部まで全形が窺える資料である。出土状況や個々の特徴については、第22表の観察一覧に詳細を記した。

第22表 陶質土器観察一覧

第四 図版 16	図 番 号	器種	部位	口 径 或 は 器 高 (cm)	観察事項	出土地
第 24 図 ・ 図 版 16	1	鉢	口～底部	20.0 11.0 10.0	形状：底部から直線的に立ち上がり、口縁部が内彎する。口縁部は厚手。文様：屈曲部に間線1条と波状文を巡らす。器色：淡橙色。素地：淡灰橙色。混和材：光る鉱物(黄)、黒色粒。内面：ロクロ肌顯著。	試掘 No.5 V～V層
	2	鍋	口縁部	20.0 -	形状：口唇部は丸みを持ち、わずかに膨らみを持つ。小破片のため、全形は不明。文様：口縁部から1.4cm直下に幅2mmの間線が1条有り。器色：橙色。	試掘 No.4 III～V層
	3	急須	口縁部	7.0 -	形状：口径より胴径が大きく、胴部にかけて膨らむ。薄く轆轤引きされる。小破片のため、全形は窺えない。文様：無。器厚：3mm。器色：淡橙色。光る鉱物(黄)。内面：轆轤肌顯著。	試掘 No.2 IV・V層
	4	火炉	底部	- -	形状：高台があり、僅かに膨らみながら立ち上がる。贅付は破損。器色：橙色。底厚：8mm；小破片のため、全体の形状は不明。	試掘 No.2 IV・V層



第24図 陶質土器



図版16 陶質土器



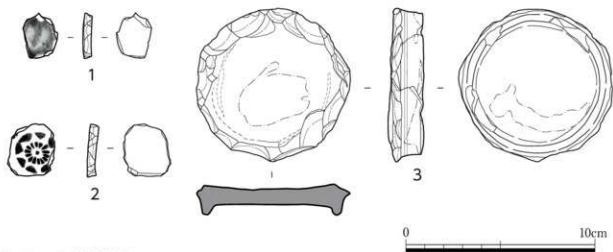
## 9. 円盤状製品

本遺跡出土の円盤状製品は3点である。素材として使用されているのは本土産磁器1点、染付1点、福建染付1点である。第25図、図版17に図示し各資料について記述する。

図1の資料は染付の胴部を利用した小型の資料である。打割は粗く形状は正円ではない。図柄の範囲より製品が小さく絵付けの図柄や範囲が確認できない。法量は長径2.4cm、短径1.8cm、器厚0.4cm、重さ2.7g、試掘No. 2、Ⅳ層・Ⅴ層出土。

図2の資料は本土産磁器の碗の胴部を用いており僅かに縦長の形状を呈す。絵付けの図柄から砥部焼と思われる。中心に図柄が位置するように打割されている。長径2.8cm、短径2.4cm、器厚0.6cm、重さ5.2g 試掘No. 1、Ⅱb層出土。

図3の資料は福建染付、碗の底部である。高台及び高台内にも釉が掛けられている。打割は底部の高台を残し一周しながら丁寧に施されている。長径8.1cm、短径8.1cm、器厚1.9cm、底径は半径約3.7cm、重さ108g、試掘抗No. 5、Ⅴ層～Ⅶ層出土。



第25図 円盤状製品

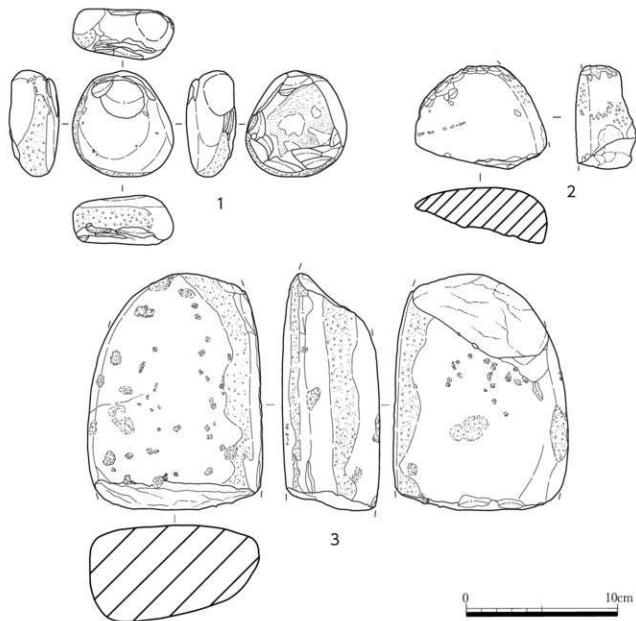


図版17 円盤状製品

## 10. 石器

今回の試掘調査で出土した石器は磨石3点で、1点は完形、2点は欠損品である。第26図、図版18に図示し各資料について述べる。

図1は小型の磨石で完形資料である。形態は略三角形、厚みをもちながら全体に丸みのある印象を呈す。研磨面は表面の大部分を占め、側面にも幾つかの小さな研磨面が確認できる。敲打痕は側面から下面の周縁にかけてみられる。裏面全体に小さな打欠が幾つも確認できる。計測値は最大長7.0cm、最大幅6.7cm、最大厚3.3cm、重量256g、石質は斑岩、試掘No. 4、Ⅲ層出土。



第26図 石器

図2の資料は磨石の破損品で全体の形態、大きさは不明、おそらく完形の半分程度の資料と考えられる。表面と右側面は顕著な研磨が確認でき上部の縁には小さな打欠が幾つもみられる。離面、その他の箇所は大きく打割され自然面が露呈する。計測値は最大長 6.8cm、最大幅 8.7cm、最大厚 3.7 cm、重量 258 g、石質は砂岩、試掘 No. 1、II b 層出土。

図3の資料は磨石で上下端部が欠損し全体の形態が不明だが概ね半月形を呈す。クガニ石と呼称する場合もあるが用途による名称でないため今回は磨石とした。左右の厚みに違いがみられ表裏面、側面ともに研磨、一部に敲打面が縦長にみられる。計測値は最大長 15.6cm、最大幅 11.6cm、最大厚 6.4 cm、重量 1.800g、石質は砂岩、試掘 No. 1、III 層出土。



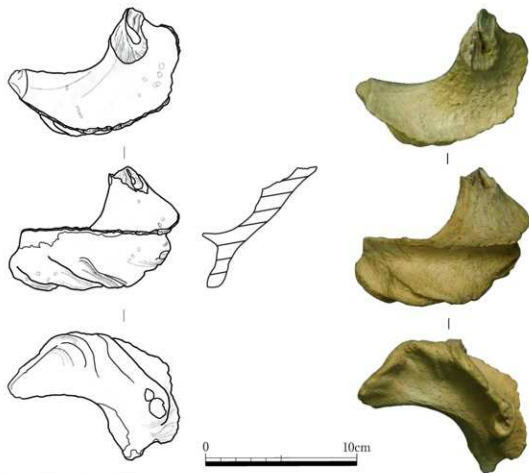
図版 18 石器

### 11. 貝製品

試掘 No. 6 の X 層以下で 1 点出土した。

図 1 はヤコウガイの臍部分で臍部に沿うよう細かい剥離が確認できる。殻の厚い臍部分を残すように剥離しているが、人工か自然かは明瞭でない。貝殻自体は破損後、水摩を受けたため、内殻の真珠層部分を含め、クレータ状のアバタが見られる。

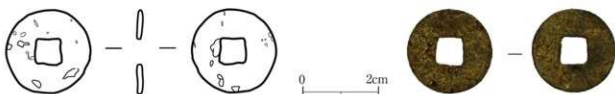
ヤコウガイの匙を取った残存部の可能性も考えられる。出土した試掘 No. 6 から貝塚後期の土器も出土しており、ほぼ同時期のもと考えられる。重さ 210g を測る。



第 27 図 図版 19 貝製品

### 12. 銭貨

1 点の出土。外径が  $2.2 \times 2.1\text{cm}$  でほぼ円形で、厚さ 1mm、内孔は  $6 \times 7\text{mm}$  の台形である。文字は確認できないが、従来の無文銭（鳩目銭）に比べて厚い。無文銭に比べて、しっかりした作りで、内孔の断面は角をなすが、外縁は打ち出しされ、やや円味を帯びることから、銅銭の類を無文銭に転用したものと思われる。試掘 No. 8 の IV 層下部の出土。重量は 2.33 g。



第 28 図 図版 20 銭貨

## 13. 鉄製品

1点出土した。

図1はほぼ完形で、長さ6.1cm、頭部は径11mm×8mmの楕円形を呈し、先端は尖る。先端の横断面は方形である。重量8.13gを測る。

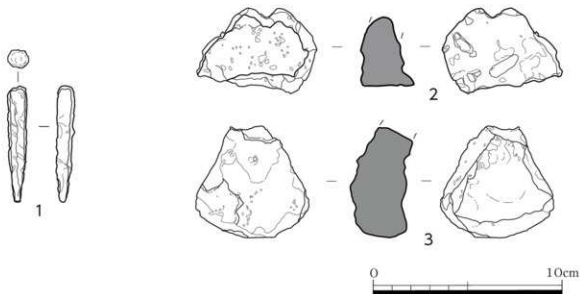
全体的に錆で膨らみ、円味を帯びるが、先端の横断面が方形を呈することから鉄釘と思われる。試掘No. 1、II層から出土した。

共伴遺物に青磁、染付などがあり、所属年代も符合する。

## 14. 鉄滓

2点出土した。

いずれも表面は気泡、アバタを呈し、裏面は熔面で円味を帯びる、同じような状況による鉄滓と考えられる。いずれも破損品で、図2は86gで試掘No. 1のII b層、図3は203gで試掘No. 6のVII層の出土である。共伴遺物を見ると図1は青磁や沖縄産施釉陶器、本土産磁器、ウシやウマ骨などで、図3は染付や沖縄産施釉陶器などであることからほぼ同じ時期のものであろう。



第29図 鉄製品・鉄滓

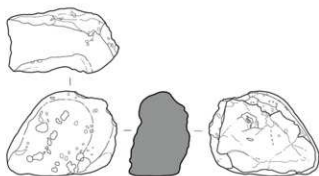


図版21 鉄製品・鉄滓

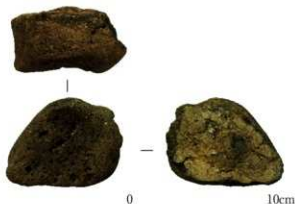
## 15. 軽石製品

今回の試掘調査で軽石は2点出土し、うち軽石製品と考えられるものが1点、2cm台の破片が1点出土している。製品としたものは小型で自然の状態でない痕跡がみられた。軽石は自然の場合、平坦な面はなく不定形な丸みを持つ形状だが当該製品は平坦面をもち、角をすり減らしたような丸みのある痕跡も確認できた。平面観は略三角形で緩い傾斜と面を成す。底面から左側面にかけて平坦な面をつくる。離面は割れた軽石の自然面が露呈するが時間の経過したと考えられる古い風化した割面と新しい割れが両者認められる。

製品を意図したものでなく自然の状態を利用し使われたと考えられる手に取まる程度の大きさである。戦前に鍋の煤落しに使われたという口承もあり近・現代の遺物と考えてよい。計測値は最大長5.6cm、最大幅7.3cm、最大厚4.3cm、重さ63g、試掘No. 2、Ⅶ・Ⅷ層出土。



第30図 軽石製品



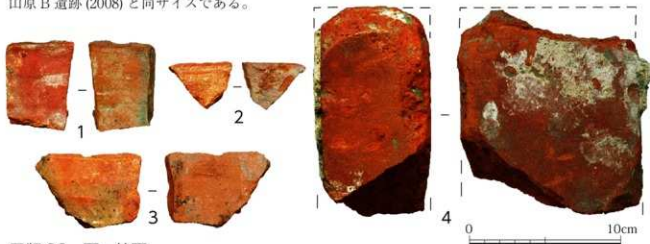
図版22 軽石製品

## 16. 瓦・煉瓦

平瓦、煉瓦に分類され、瓦11点、煉瓦1点計12点の出土である。出土地別にみると瓦が試掘No. 1で3点、試掘No. 2で5点、試掘No. 4で3点、煉瓦が試掘No. 3で1点の出土である。すべて近現代の時期のものであり、器種に分かる4点について図版のみ掲載した。図版1～3は平瓦で表面にヘラナデ、裏面に布目痕が見られ、図版4の煉瓦は、残存部の大きさが縦10.9cm、横10.9cm、厚さ6.0cmを測り平安山原B遺跡(2008)と同サイズである。

第23表 瓦・煉瓦出土量

出土地	種類	瓦		煉瓦	合計	試掘場所合計
		平瓦	不明			
試掘No. 1	Ⅱ層	2			2	3
	Ⅲ層		1		1	
試掘No. 2	Ⅳ・Ⅴ層	5			5	5
試掘No. 3	Ⅲ層			1	1	1
試掘No. 4	Ⅲ層	3			3	3
合計		10	1	1	12	12



図版23 瓦・煉瓦

## 17. 動物遺体

魚類ではハリセンボン1点、鳥類ではトリ? 四肢骨2点、哺乳類ではジュゴン? 1点、イノシシ6点、ブタ7点、イノシシ or ブタ不明4点、ウシ8点、ウマ2点、ウシ or ウマ3点、ヤギ1点の合計35点出土した。

出土地別にみると試掘 No. 1 ではⅡ層でジュゴン椎体1点、ウマL下顎前臼歯(p)、左下顎第3後臼歯(M3)、イノシシの右距骨、ウシの頭骨、左下顎骨、尺骨、中手(足)四肢骨の破片が出土した。Ⅲ層でイノシシの右脛骨、ブタの肋骨やヤギの橈骨が出土した。

試掘 No. 2 ではⅣ・Ⅴ層からブタの右上腕骨が1点得られたのみである。

試掘 No. 3 ではⅣ・Ⅴ層でブタ左脛骨、イノシシかブタの四肢骨片2点、S3からブタ右尺骨がほぼ完形で出土した。

試掘 No. 4 ではⅢ層でウシ歯破片が1点出土した。

試掘 No. 5 のⅨ・TP5ではハリセンボン顎骨1点、イノシシ幼の左上腕骨(図版24)、イノシシ or ブタ右尺骨(図版24)、イノシシの四肢骨片が得られた。

試掘 No. 6 ではⅧ層でイノシシの四肢骨片が2点出土したのみである。

試掘 No. 7 ではⅤ層でトリ?の四肢骨2点、ブタ左踵骨、イノシシ or ブタ四肢骨が各々1点の計4点出土した。

試掘 No. 8 ではⅧ層でブタ左大腿骨、右脛骨1点、ウシの四肢骨片、S2でウシ or ウマ四肢骨片が各々1点出土した。ブタの大腿骨は完形で、近位部の骨端が外れており、若獣で食用の可能性が高い。

第24表 脊椎動物遺体出土一覧

試掘坑番号	遺構名	層	種類	部位	左右	部位 a	備考	個数	図版番号	
試掘 No. 1		Ⅱ b	ジュゴン?	椎体				1	25	
			イノシシ	距骨	R			1	6	
			ウマ	下顎骨	L	p M3		1	23	
			ウシ	頭骨	不		破片	1	15	
				下顎骨	L		破片	1	16	
				尺骨	不		破片	1	18	
		中手(足)骨		不	s	破片	1	19		
		四肢骨	不		破片	2				
		Ⅱ a Ⅱ b	ウシ or ウマ	下顎骨	不		破片	2	21	
		Ⅲ	イノシシ	脛骨	R	psd	幼	1	5	
			ブタ	肋骨	不	-		1	9	
			ヤギ	橈骨	不	d	中手(足)かも	1	24	
試掘 No. 2		Ⅳ・Ⅴ	ブタ	上腕骨	R		1	10		
試掘 No. 3	S3	Ⅳ・Ⅴ	ブタ	脛骨	L	p・s		1		
			イノシシ or ブタ	四肢骨	不		破片	2	8	
			ブタ	尺骨	R	psd		1	11	
試掘 No. 4		Ⅲ	ウシ	歯		破片	1	17		
試掘 No. 5		Ⅸ・TP5	ハリセンボン	上(下)顎骨				1	1	
			イノシシ	上腕骨	L	sd・p・s・d	幼	1	4	
			イノシシ or ブタ	尺骨	R	s		破片	1	7
			イノシシ	四肢骨	不	-		破片	1	
試掘 No. 6		Ⅷ	イノシシ	四肢骨	不		破片	2		
試掘 No. 7		Ⅴ	トリ?	四肢骨	不			2	2.3	
			ブタ	踵骨	L			1	14	
			イノシシ or ブタ	四肢骨	不		破片	1		
試掘 No. 8	S2	Ⅷ	ブタ	脛骨	R	s・d		1	13	
			ウシ	大腿骨	L	h ep・p・s・d	幼	1	12	
			ウシ	四肢骨	不		破片	1	20	
			ウシ or ウマ	四肢骨	不		破片	1		
合 計								35		

## 18. 貝類遺体

出土数は85点と少なく、陸産貝2種、巻き貝9種、二枚貝12種である。

出土地別には試掘 No. 3 が80点と最も多く、試掘 No. 5 が4点、試掘 No. 6 が1点の出土である。内訳をみると最も多い試掘 No. 3 では

<Ⅴ層>

リュウテン科のチョウセンサザエのほぼ完形が1点出土。

<Ⅶ層>

マスオガイ、リュウキュウシラトリ合弁で出土（図版25）することから、自然堆積と判断される。貝を計測するとマスオガイは14個体で、貝の大きさは最も小さいのは殻高2.3cm×殻長4.6cm、最も大きいのは殻高2.9cm×殻長6.2cmである。

リュウキュウシラトリは6個体で、貝の大きさは最も小さいのは殻高2.4cm×殻長3.2cm、最も大きいのは殻高3.2cm×殻長4.2cmと測る。

他にヤコウガイやマガキガイなどの巻き貝、リュウキュウザルガイ、アラスジケマンガイ、ユウカゲハマグリ、ホソスジイナミガイ、カワラガイ、シラナミなどの二枚貝が出土した。いずれも砂浜に生息するものである。

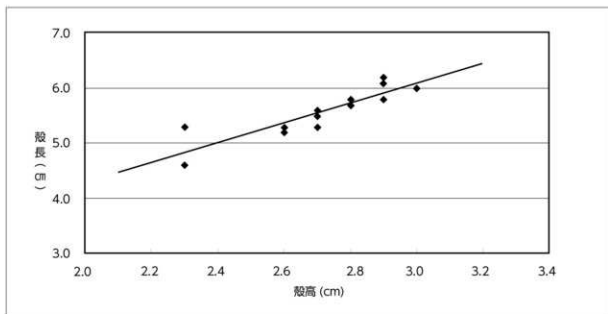
<S3、6、7>

溝状の遺構?から出土

S3ではアラスジケマンガイ、S7ネジマガイ、マガキガイ、ホシキスタが各々完形1点出土。

S6では陸産のオキナワヤマタニシ2個、パンタナマイマイが4個体、巻き貝ではニシウズガイ、マガキガイ、ネジマガキガイ、シマベッコウバイ、二枚貝ではカブラツキガイ、イソハマグリ、リュウキュウシラトリ、マスオガイ、ユウカゲハマグリなどが出土した。

試掘 No. 5ではⅧ層でクマノコガイの完形2点、ヤコウガイのフタ完形（4.1cm×4.7cm）1点とクモガイ破片が得られ、試掘 No. 6ではヤコウガイの破片が1点出土したのみである。

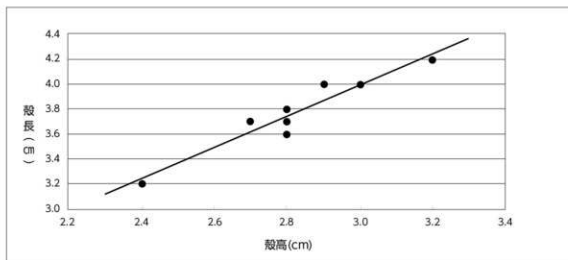


第31図 マスオガイの殻高一殻長相関関係



第25表 貝類遺体出土量

試掘坑 番号	通稱 名	順序	種類	貝種	完形		殻頂		殻頂破		殻底		肩部		破片		細片	備考	合計	図版 番号				
					L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R								
試掘 No. 3	S3		二枚	アラスジケマンガイ		1													1	24				
				オキナワヤマタニシ		2															2	11		
	S6	巻貝	パンダナマイマイ		4															4	12			
			ニシキウス													2					2	5		
			マガキガイ	1		1															2	7		
			シマベッコウガイ				1													色残	1	10		
			ネジマガキ				1														1	6		
		アオリ?						1								2				3	13			
		カブラツキガイ				1														1	15			
		イソハマグリ				1	1													2	16			
		リュウキュウシラトリ				1														1	17			
		マスオガイ				1														1	18			
	ユウカゲハマグリ							1											1	20				
	S7	巻貝	ネジマガキ		1															1	6			
			マガキガイ		1		1													2	7			
			ホシキヌタダカラ		1															1	9			
			V	巻貝	チョウセンサザエ		1													完形孔	1	1		
			Ⅲ上位	巻貝	クモガイ												1				1	8		
			Ⅲ	巻貝	ヤコウガイ													3				3	2	
					マガキガイ				1													1	7	
				二枚貝	メンガイ														1			製品?	1	14
					マスオガイ				14	13		1										定対14	28	18
					リュウキュウシラトリ				6	6												定対6	12	17
	リュウキュウザルガイ									1							1				2	21		
	アラスジケマンガイ										1										1	24		
	ユウカゲハマグリ										1										1	20		
	シラナミA								1										1	23				
	ホソスジイナミガイ								1										1	19				
試掘 No. 5	Ⅲ	巻貝	カワラガイ		1														1	22				
			クマノコガイ		2															2	4			
試掘 No. 6	X以下	巻貝	ヤコウガイ(フタ)		1														1	3				
			クモガイ														1			1	8			
合計					42	21	5	5	0	0	0	0	0	0	12	0	0	0	85					



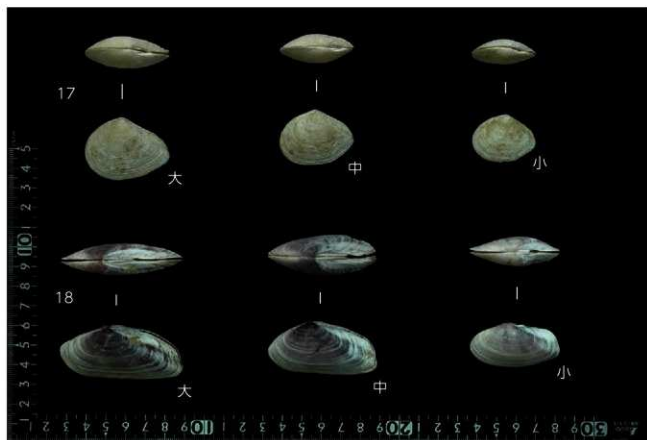
第32図 リュウキュウシラトリの殻高—殻長相関関係



1.ノヒネン(上・下)顎骨 2.3.臼骨 4.イナシ(上腕骨 L幼) 5.イナシ(脛骨 R幼) 6.イナシ(距骨 R) 7.イナシ(尺骨破 R) 8.イナシ(尺骨破) 9.アチ(肋骨) 10.アチ(上腕骨 R) 11.アチ(尺骨 R) 12.アチ(大腿骨 L幼) 13.アチ(脛骨 R) 14.アチ(踵骨 L) 15.カシ(頸骨破) 16.カシ(下顎骨 L) 17.カシ(歯破) 18.カシ(尺骨破) 19.カシ(中手(足)骨) 20.カシ(股骨破) 21.カシ(下顎骨破) 22.23.カシ(下顎骨 L) 24.サシ(中手(足)骨) 25.ジゴシ(椎骨)



図版 24 上：脊椎動物遺体  
下：貝類遺体 1 (巻貝・陸産貝・二枚貝)



図版 25 貝類遺体 2 (上: 巻貝・二枚貝)  
(下: 合弁貝、リュウキウシラトリ・マスオガイ)

## 第V章 まとめ

本試掘調査は、平成7～9年度にかけて行われた「キャンプ桑江北側返遷に伴う試掘調査」の未実施箇所を行ったものである。現地調査は平成21年3月に行い、近世から戦前の溝やピットを確認した。出土遺物には、グスクから戦前にかけての遺物を中心に貝塚時代後期の土器や曾畑式土器が数点得られた。以下、今回の調査結果を概観しまとめたい。

調査地は、戦後米軍基地として機能していた地区である。一帯は基地建設の際に造成されており、旧表土を確認するまでには機械力でもって1m近く掘り下げた。米軍造成土を掘りきると、グスク時代～戦前の土壌が表出する事が周辺の発掘調査結果から確認されており、今回の調査地においても概ね同様な傾向を追認できた。

戦前米軍が撮影した空中写真や『北谷町の地名』から、戦前における試掘箇所を実施した一帯は、北側に丘陵が南側に東シナ海が広がっていたことが判る。それらに挟まれる場所に平安山集落が位置し、集落を南北に二分する形で旧道（ケンドー）が貫いている。今回の調査対象地は旧道よりも北側に位置しており、平安山原祝女殿内をはじめとする屋敷があったことが確認されている。

試掘実施箇所の土地利用状況を見ると、南東側の試掘坑4箇所は平安山集落の居住空間に位置し、北西側の4箇所は田畑に位置すると想定できる。特に試掘No.1は「祝女殿内」の敷地付近であり、何らかの生活痕跡が残されているものと思われる<sup>(註1)</sup>。戦前の平安山集落は農業優良部落として県から表彰されるほどの純農村であった。生業の中心はサトウキビとイモ作りで、水田もあったが規模は小さく、ほとんど自家用にあてられたようである。それら屋敷跡や耕作地の分布は、面的な調査によって明らかになるものと思われる。

グスク時代の遺物は土器や青磁が少量出土するも、同時期の遺構を積極的に示す結果は得られなかった。本時期の遺跡の本体は、調査区に南接する平安山原A遺跡であったと想定される。平安山原A遺跡は、グスク土器や中国産陶磁器類が多数出土しており、また、15、16世紀に比定される海獣葡萄鏡が出土（二次堆積）している。同遺物は、民俗事例から集落の祭祀を司る「ノロ」の所有物としての伝製品とみられており、更に、前述した「祝女殿内」屋敷跡の存在が確認されていることから、当該地は平安山集落の成立を考える上で重要な位置を示すものと考えられる。また、調査区から南東400mに位置する伊礼原遺跡をはじめ、伊礼原D遺跡から多くの遺構が検出されていることや、本試掘箇所の北西側において千原遺跡（グスク時代）が確認されている事から、この時期には一帯に集落が広がっていたものと想定される。

貝塚時代後期の遺物は土器を中心に定量出土しているが、明確な遺構を確認することはできなかった。過去の試掘調査の結果によって、より古い遺跡は丘陵と沖積地の接点に立地することが確認されていることから、試掘No.1・3・5といった丘陵麓か、平安山原B遺跡が本体として想定される。

貝塚時代早期の遺物は、曾畑式土器が2点出土したのみである。この結果から見ると、調査地一帯に同時期の遺跡は存在しないものと考えられる。キャンプ桑江北側地区では、比較的広範囲にわたって曾畑式土器が単発的に出土しており、本地区もその事象の1つと考えられる。遺跡の本体は伊礼原遺跡周辺に限定されるであろう。

試掘 No. 2・4からはビーチロックが検出された。伊礼原 D 遺跡（資料整理中）の下層調査においてもビーチロックが確認されており、ビーチロック内やその下層からは曾畑式・室川下層式・仲泊式等に比定される土器が出土している。同事象から、伊礼から平安山原地区にかけて見られるビーチロックは、縄文時代後期までに形成され、その後砂丘化が進んだものと考えられる。

今回の調査は、過去に行われた試掘調査の結果を追認する形となった。補足的に平安山原集落の拡がりを確認することができたことが成果として挙げられよう。本報告が平安山集落の成因を考える一助となれば幸いである。

最後に、試掘調査の実施から報告書刊行に至るまで多くの方々の御指導、御協力を賜りました。様々な想いを纏めあげることができたのか、いささか心もとないですが、皆様方の御厚意に心から感謝申し上げます。

註1 本試掘調査後の平成 21 年度に実施した平安山原 A 遺跡の発掘調査において（資料整理中）平安山ノロの屋敷跡が検出されており、その周囲からも多くの遺構が検出されている。遺構の範囲は、過去の試掘調査の結果から想定された平安山原 A 遺跡よりも更に北西側に拡がる事が判明している。

#### <参考文献>

- 北谷町教育委員会 1992 『北谷町史 第三巻 資料編 2 民俗 上』  
北谷町教育委員会 1994 『北谷町史 第三巻 資料編 2 民俗 下』  
北谷町教育委員会 2005 『北谷町史 第一巻 通史編』  
北谷町教育委員会 2005 『キャンプ桑江北側返還に伴う試掘調査—伊礼原 B 遺跡ほか発掘調査事業—』  
北谷町教育委員会 2006 『北谷町の地名—戦前の北谷の姿—』  
北谷町教育委員会 2007 『伊礼原遺跡—伊礼原 B 遺跡ほか発掘調査事業—』  
北谷町教育委員会 2008 『平安山原 B 遺跡—キャンプ桑江北側返還に伴う発掘調査事業（平成 14・15 年度）—』  
北谷町役場 2008 『基地と北谷町』

## 附 編

### 第1節 調査に至る経緯

平成21年、北谷町教育委員会は、本町建設経済部施設管理課より、桑江伊平土地区画整理事業地内において排水路の工事を行う計画があるとの情報を得た。工事対象箇所は過去における文化財調査が未実施だった場所であった為、平成22年2月から3月にかけて、工事対象箇所の分布調査を実施した(第33・34図)。調査対象地は、北谷町字伊平大作原に位置する。

### 第2節 調査の概要

#### 1. 分布調査

分布調査は平成22年2月26日と3月2日の2日間行った。分布調査の結果、工事予定箇所内にて人工的な平坦部を確認することができた。また、平坦縁部には土手や溝が認められ、土手表面は石灰岩礫が無造作に覆っていた。文化係内で上記の状況を検討したところ、何かしらの耕作に関わるものと判断された。そこで、平坦部の様相を確認する為、試掘調査を実施する事とした。

#### 2. 試掘調査

試掘調査は平成22年3月15日～3月24日の間に行った(実働6日)。試掘箇所は分布調査の結果確認された3箇所の平坦部に絞って任意に3箇所設定した。各試掘穴は北から順に①～③の番号をあて、人力で掘削した。試掘穴の面積は、①②は2m×2m、③は3m×1.5mと設定した。調査の結果、各試掘穴とも同様な堆積状況を示しており、概ね20cm程掘削すると地山に到達した。出土遺物は、近～現代の陶磁器類小片が数点出土するのみで、明確な遺物包含層や遺構面を確認することはできなかった。試掘穴①は、西側土手と溝の掘削も行ったが、目立った成果は得られなかった。

### 第3節 調査の成果

#### 1. 層序

今回の試掘調査では各試掘穴とも同様な堆積状況を示し、層序は3枚認められた。以下に各試掘穴の層序を一括して紹介する。

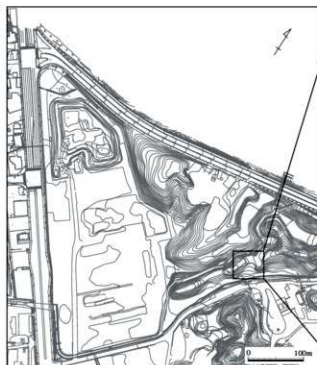
- I層：黒色腐植土(層厚1～2cm)粘りが強く、締まりは弱い。近年堆積した落葉類を取り除くと確認できる層。下部からビニールが露出した。
- II層：灰黄色粘質土(層厚10～15cm)粘りが強く、締まりはやや強い。耕作土と考えられるが、畦やビット等は確認できなかった。出土遺物として、沖縄産無釉陶器、沖縄産施釉陶器、本土産磁器の小片(2～3cm程度)が数点出土。その他、針金も出土している。
- III層：橙黄褐色粘質土(層厚5cm～)粘りが強く、締まりはやや強い。土手側では橙色が強く、平坦面側では黄色が強い。安定した堆積の層中には、板状の石灰岩礫が寝た状態で確認できる。付近一帯の地山にも同様な状況が確認できる事から、地山と考えられる。出土遺物無し。

#### 2. まとめ

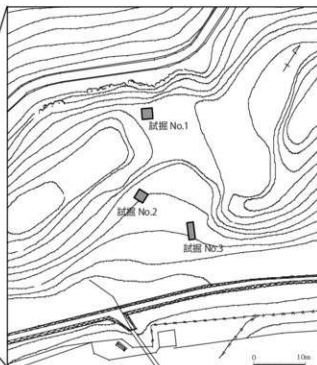
今回の調査結果では、当初考えられた耕作地を示す有力な遺構は確認できなかった。しかし、可視できる平坦部や土手等から、当該地における人の動きについて考察し、まとめたい。

ある時期、何らかの目的を持った人々が当丘陵地に入り、比較的平坦地を選地・切土したものと考えられる。切土して出た土は平坦縁部に盛り、土手を設け、溝を並走させたのだろう。その後、平坦面を利用して耕作を行い、掘削時に掘り起こされた石灰岩礫が土手を覆ったものと想定していたが、上記に述べたように耕作痕は認められなかった。

調査中、試掘穴周辺からヘラを1点表採した。①刃先が細く尖り、②刃部だけではなく柄の部分も鉄で出来ているものであった。同資料を60～70代の作業員数名に見て戴いたところ、①刃先が細く尖っているので新しい印象を受ける。②は、戦後の特徴である。との見解が得られた。また、I層下部からはビニールが、II層からは針金が出土していることから、当該地は戦前から戦後にかけて人の手が増えられたものと考えられる。



第33図 試掘調査位置図



第34図 調査位置拡大図



図版 26 出土遺物



図版 27 表採遺物



図版 28 試掘 No.1 左上・伐採状況 右上・完掘（南より）  
 左中・ビニール露出 右中・針金出土  
 左下・土手断面（南より） 右下・清断面（南より）





図版 29 試掘 No.2、No.3

左上・No.2Ⅱ層検出 右上・No.2Ⅲ層検出  
 左中・No.2完掘（東より） 右中・No.3Ⅱ層検出  
 左下・No.3Ⅲ層検出 右下・No.3完掘（南より）

## 報 告 書 抄 録

ふりがな	はんざんばるちくしくつちょうさ							
書名	平安山原地区試掘調査							
副書名	伊礼原B遺跡ほか発掘調査事業							
巻次								
シリーズ名	北谷町教育委員会文化財調査報告書							
シリーズ番号	第33集							
編著者名	松原哲志・山城安生・島袋春美・上地千賀子・呉屋広江							
編集機関	北谷町教育委員会							
所在地	〒904-0192 沖縄県中頭郡北谷町字桑江226番地 TEL 098-936-3159							
発行年月日	2011年(平成23年)3月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
はんざんばるちく 平安山原地区	沖縄県 北谷町 字伊平 平安山原	473260		26° 19' 20"	127° 45' 26"	2009.03.02 ～ 2009.03.27	200㎡	区画整理事業
はんざんばるちく 大作原地区	沖縄県 北谷町 字伊平 大作原	473260		26° 19' 20"	127° 45' 39"	2010.02.26 ～ 2010.03.24	12.5㎡	区画整理事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
はんざんばるちく 平安山原地区	集落跡	貝塚時代後期 ～戦前	溝・ピット	曾畑式土器・貝塚時代後期土器・ダスク土器・青磁・染付・本土産磁器・沖縄産施釉陶器・沖縄産無釉陶器・陶質土器・円盤状製品・瓦・石器・貝製品・銭貨・鉄滓・獣魚骨・貝類遺存体		近世～戦前のピット・溝を確認		
はんざんばるちく 大作原地区		戦前～戦後		沖縄産陶器等				
要約	<p>今回の試掘調査地は、平成15年3月に返還されたキャンプ桑江北側地区において、試掘調査が未実施だった箇所である。平安山原地区の試掘調査の結果、貝塚時代早期・後期、ダスク時代、近世～戦前の遺物が出土した。遺構は、近世～戦前のもと考えられる溝やピットが確認された。大作原地区では、戦前から戦後の遺物が数点出土したが、遺構は確認されなかった。</p>							

---

北谷町文化財調査報告書 第33集  
平安山原地区試掘調査  
－伊礼原B遺跡ほか発掘調査事業－

編集：北谷町教育委員会

発行年：2011（平成23）年3月

〒904-0192 沖縄県北谷町字桑江226番地

TEL 098-936-3159

印刷：株式会社平山印刷

〒901-0225 沖縄県豊見城市字豊崎3-59番地

TEL 098-995-6233

---

